

目次

はじめに	3
第 1 章 大学生協の概要	
1.1 生協とは何か	4
1.2 大学生協とは何か	4
1.3 大学生協の概要	5
1.4 大学生協の仕組みと運営	7
1.5 大学生協の事業・活動	8
1.6 学生委員会とは何か	10
第 2 章 大学生協の歴史	
2.1 学生は学生の店へ（1898～1944 年）	10
2.2 学ぶことは食うこと（1945～1950 年）	10
2.3 衰退から再建へ（1951～1960 年）	11
2.4 組合員の様々な要求を基礎に（1961～1972 年）	11
2.5 学園に広く深く根ざした生協を目指して（1973～1979 年）	12
2.6 新しい協同をめざして（1980～1990 年）	12
2.7 共感されるビジョンづくりと実現（1991～2003 年）	12
2.8 個性輝く大学生協を目指して（2004～2006 年）	13
2.9 大学生協の今後（2007 年～）	13
第 3 章 学生生活と大学生協	
3.1 大学生の学生生活の実態	14
3.2 大学生協の活動と学生生活へのはたらきかけ	19
第 4 章 北海道教育大学の大学生協における学生へのはたらきかけ	
4.1 北海道教育大学 5 生協の事業概要	23
4.2 北海道教育大学 5 生協の事業・活動について	24
4.3 北海道教育大学の大学生協における学生へのはたらきかけ	27
第 5 章 学生委員会	
5.1 学生委員会の活動	29
5.2 北海道教育大学 5 生協学生委員会の活動	29
5.3 北海道教育大学 5 生協学生委員会の活動の特徴	37

第 6 章	小規模大学生協における学生活動の考察	
6.1	小規模大学生協における学生活動の現状	38
6.2	他の大学生協における学生活動の一例	39
6.3	小規模大学生協における学生活動への提言	41
おわりに		43
参考文献・参照 HP		44

はじめに

私が大学生協についての卒業論文を作成したいと考えたのには、私が大学生協の学生委員会に所属していた経験があるというのが理由としてある。大学入学時から3年生の5月までのおよそ2年間という短い期間ではあったが、私はその期間に学生としても一人の人間としてもとても多くのことを学んだと考えている。日頃の活動のなかでのやりがいや、企画・運営における行動力や責任能力の大切さ、そして学生委員会の仲間や周囲の人たちとの人間関係の大切さなど、挙げていくときりがないほどである。このことは私の大学生活において非常に貴重な、そして非常に素晴らしい経験であったといえることができる。そのような経験があったからこそ、卒業論文の研究テーマを決定する際に、私は真っ先に大学生協について研究をしたいと考えたのである。

本論文では、大学生協・学生委員会とはどのようなものであるか、その概要などに触れたうえで、大学生協・学生委員会が主に事業の対象としている学生にどのようなはたらきかけをしているのかについて述べていく。そして、その大学生協のなかでも私にとって最も身近である北海道教育大学5生協、その事業・活動・学生へのはたらきかけについて考察していく。

第1章では、大学生協という組織の概要や仕組み、行っている事業・活動について述べていく。一般的な民間企業とは異なる性質をもつ大学生協がどのようなものであるのかについて見ていく。

第2章では、大学生協の歴史について述べていく。戦前・戦後の大学生協ができるに至るまでの道のりから、近年の大学生協の動向まで幅広く見ていく。

第3章では、大学生協の学生生活に対するはたらきかけについて述べていく。学生生活の現状を確認し、それを踏まえたうえで大学生協は具体的にどういった活動を行っているのか見ていく。

第4章では、小規模大学生協のひとつである北海道教育大学5生協が学生にどのようなはたらきかけを行っているのかについて述べていく。実際に行われている事業・活動を中心にして、その特徴や影響についても見ていく。

第5章では、大学生協が事業・活動を行うにあたって欠かすことのできない存在である学生委員会について述べていく。その詳しい活動内容について、北海道教育大学の学生委員会の活動を取り上げて見ていく。

第6章では、小規模大学生協の学生活動について述べていく。他の大学生協の活動との比較を行いながら、学生委員会に求められている活動について考え、今後に対する提言を行う。

第1章 大学生協の概要

1.1 生協とは何か

日本の生協は、1948年に制定・施行された消費生活協同組合法（生協法）に基づき設立され、運営されている。2007年5月、生協法が59年ぶりに抜本改正され、2008年4月から改正法が施行されている。生協はこの法律によって社会的に認められた「法人」となっている。

生活協同組合は、自分たちの生活を自分たちの手で守るためにお金を出し合い、そのお金で商品を仕入れて安く分け合うところから始まった。自分たちのお金を出し合ってつくり、自分たちの力で運営していくというのが生協の運営の基本である。不特定多数を顧客として株主や会社の利益を追求する一般的な株式会社などとは異なり、生協は「より良い商品をより安く」「より良い生活と平和のために」など、自分たちの生活の向上や安全を願う人たちがお金（出資金）を出し合い、自分たちのためにさまざまな活動をしていく組織である。

各生協の定款は、生協法に基づいて厚生労働省が定めた模範定款例に準拠しながら各生協の実態に合わせてつくられている。すべての生協は生協法とその生協の定款によって運営されているのである。

1.2 大学生協とは何か

大学生協は、一般の消費生協が「地域生協」であるのに対し、一定の職域による「職域生協」のひとつである。主に学校（大学、短期大学、高等専門学校、専門学校（専修学校）、ほかに一部の大学共同利用機関など）の学生や教職員を組合員とするものである。多くは、全国大学生生活協同組合連合会に加盟する。全国大学生生活協同組合連合加盟生協では愛称として「ユニブコープ」（UnivCoop）が用いられている。

大学生協は一般の消費生協と同じように、組合員（大学生協ならば、学生、大学教職員、生協職員）の出資により運営される。出資金は入学時など加入の際に納入し、卒業時など脱退の際に返還される。剰余金が発生した場合の組合員への還元等は、他の生協と同様である。

現在、大学生協の使命として

- ・「協同」：学生・院生・留学生・教職員の協同で大学生活の充実に貢献する
- ・「協力」：学びのコミュニティとして大学の理念と目標の実現に協力し、高等教育の充実と研究の発展に貢献する。
- ・「自立」：自立した組織として大学と地域を活性化し、豊かな社会と文化の展開に貢献する。
- ・「参加」：魅力ある事業として組合員の参加を活発にし、協同体験を広めて、人と地球にやさしい持続可能な社会を実現する。

以上の4つを掲げており、この4つの使命に基づいて活動をすすめて、様々な分野で魅力ある大学づくりと学生・教職員のキャンパスライフに貢献している。

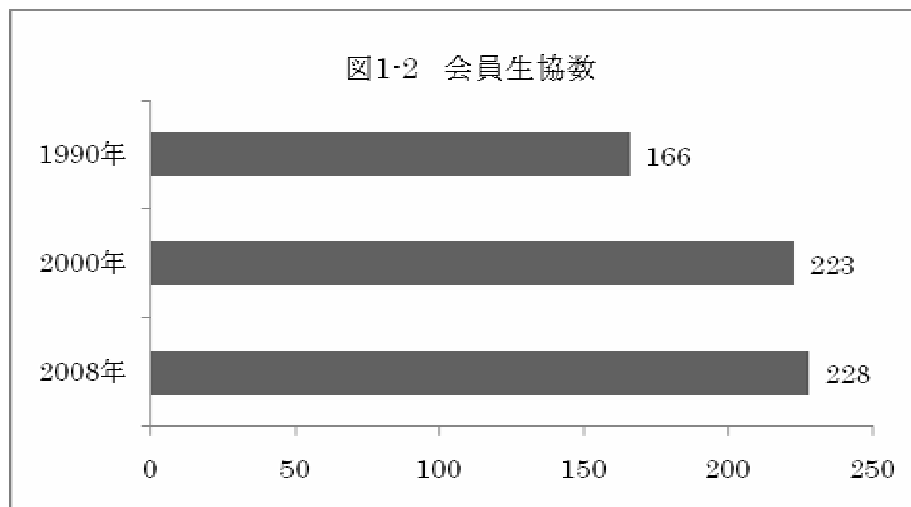
図 1-1 大学生協 4 つの使命



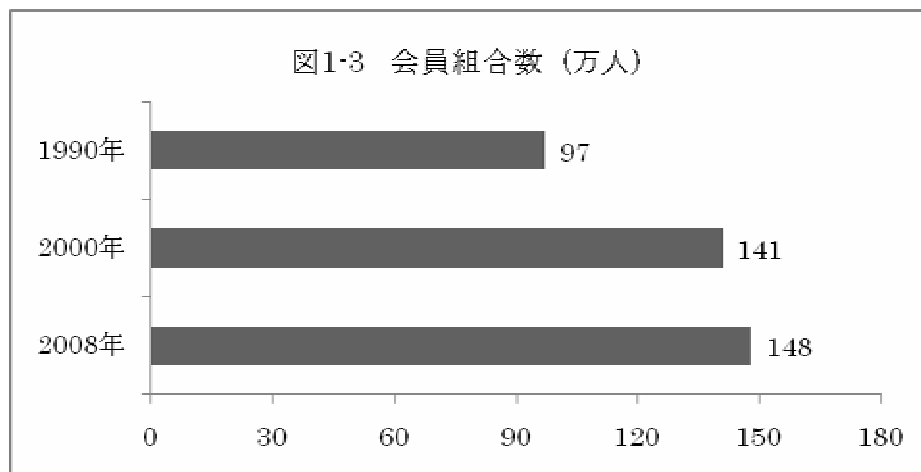
出典：大学生協北海道事業連合 HP

1.3 大学生協の概要

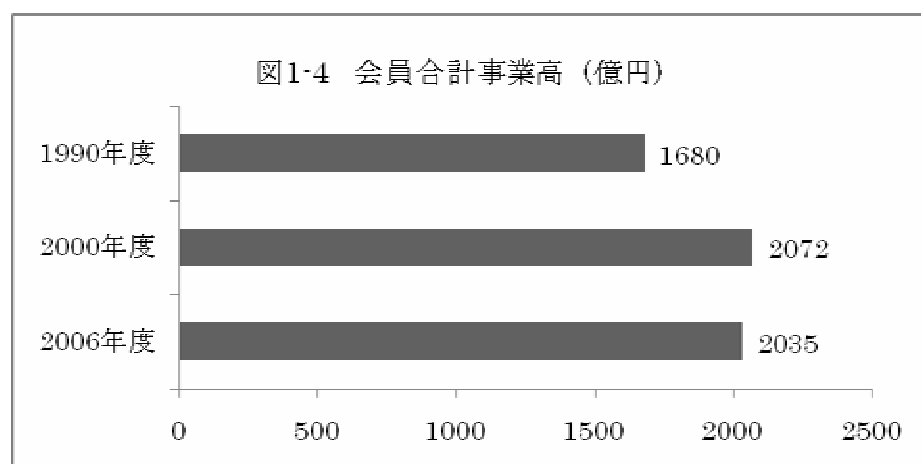
1947年5月25日に「全国学校協同組合連合会」が発足され、その後1958年8月19日に同組織が法人化し、現在の「全国大学生生活協同組合連合会」（略称：全国大学生協連）が創立された。2008年3月現在で会員生協数は228会員（212大学生協、10事業連合、6インターカレッジコープ）が加盟している。会員組合員は約148万5000人（2007年9月現在）で、会員からの全国大学生協連への出資金は9億6267万円（2007年9月現在）となっている。会員合計事業高は2035億円（2006年度）となっており、そのなかでも購買・サービス事業の割合が3分の2を占めている。



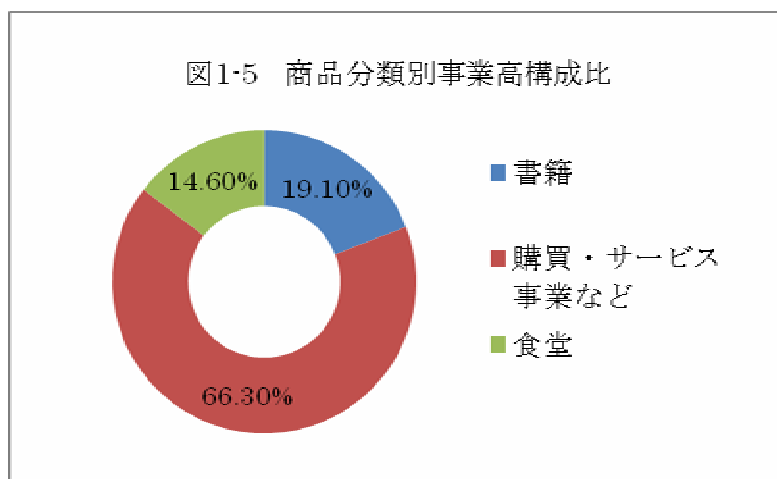
出典：大学生協 REPORT2008



出典：大学生協 REPORT2008



出典：大学生協 REPORT2008



出典：大学生協 REPORT2008

1.4 大学生協の仕組みと運営

大学生協は組合員になって利用する組織であり、一方で自発的に手を結んだ人々の自治的な組織でもある。大学生協は組合員の出資をもとに運営されるため運営も組合員によって行われるものであるが、組合員の人数が多くなると、その全員が集まりあらゆる事項を決定することや多くの業務を組合員のみで分担して実行することは難しくなる。そのため、日常的な事務経営は職員に委託し、その他の組合員活動は組織委員会などが中心となって行っている場合が多い。ただ組合員が運営する組織であるため、その活動や運営に組合員が積極的に参加することのできる「仕組み」が必要になり、またそれを実行するための「仕組み」も必要なのである。

1.4.1 総代会（総会）

組合員が活動や運営に積極的に参加することができる「仕組み」の中心となるのが「総代会（総会）」である。組合員数が 500 名を超える場合には、組合員のなかから総代を選出し総代会を開くのである。総代は総代会に出席することで大学生協の方針の決定に参加し、また組合員の声・要望を生協運営に反映させる役割なども持っている。そのため、総代によって組合員の意思が反映されるこの総代会は、大学生協の意思決定のための最高議決機関となる。

総代会は事業年度毎に 1 回以上開催することが生協法や定款で定められており、そこでその生協の 1 年間の事業報告・決算と事業計画・予算を決定するほか、理事・監事という生協運営の役員を選出する。

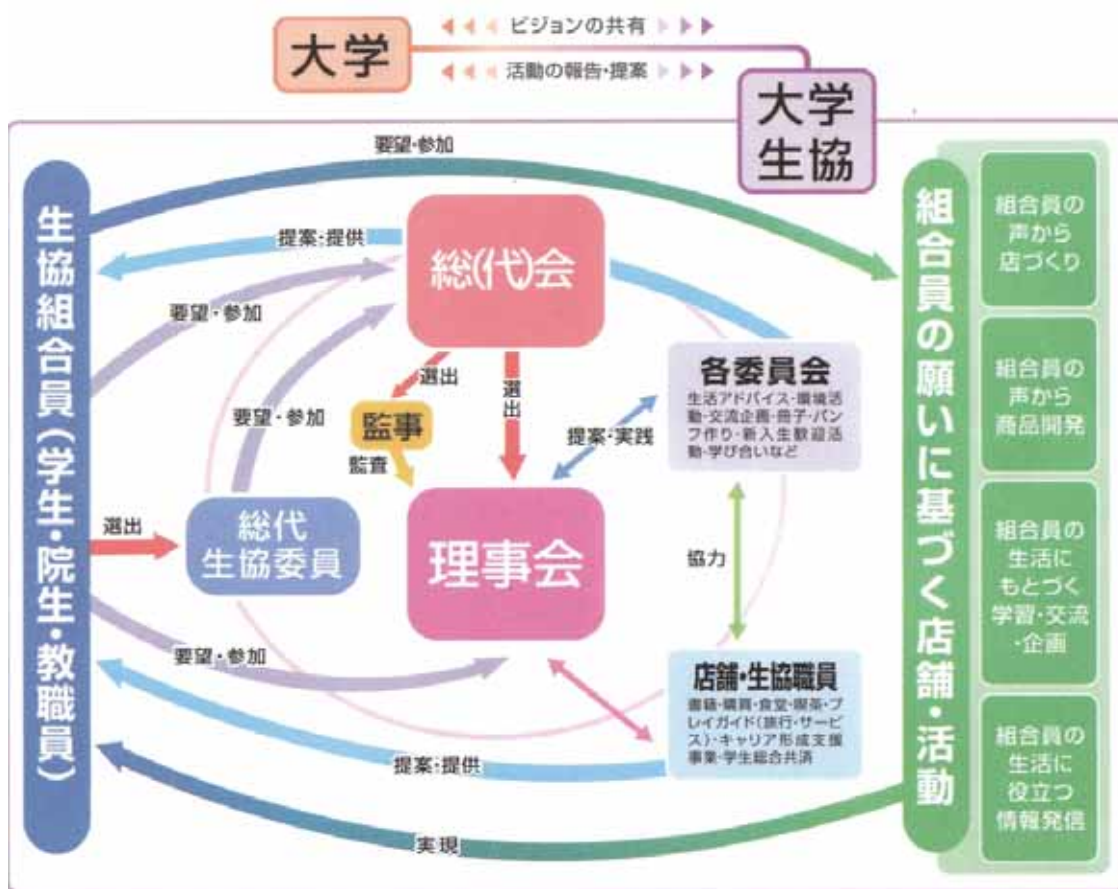
1.4.2 理事会

実行するための「仕組み」となるのが「理事会」である。総代会で選出された理事は、総代会の決定に基づいて業務執行を担うのである。また、すべての理事で構成する理事会

は、総代会での決定に基づいて、さらに具体的な活動の方針を決定・具体化を行うのである。理事会では、理事長・専務理事が選定され、理事長は大学生協の業務全体の総括を行い、専務理事は理事長を補佐し大学生協の業務を執行している。

理事会のそのひとつひとつの決定や執行は直接組合員の利益・不利益につながるため、理事会の決定には、組合員の生活や意見が十分に反映されていることが求められるのである。

図 1-6 大学生協の運営の仕組み



出典：大学生協ハンドブック

1.5 大学生協の事業・活動

大学生協では「魅力ある大学づくりと組合員の生活に貢献する」という目標を掲げ、大学生協店舗で様々な事業を行い、学生委員会が様々な活動を行っている。

大学生協では「4つの事業分野」(「勉学研究生活分野」「日常社会生活分野」「自己開発体験分野」「食生活と健康安全分野」)を中心に、組合員の意見や願いをもとに事業を通じて組合員の生活をサポートしてきた。大学生協の店舗は4つの役割、

- ・組合員が協同して生活要求を実現する場

- ・生協理事会が事業政策を執行する場
- ・生協職員が生活し成長する場
- ・生協経営を支える場

を持っているが、組合員の生活場面は多様化・複雑化しており、それにふさわしく対応できているかが問われている。「4つの事業」を基礎にして、生協が組合員の生活場面に参加することで、その都度事業の見直しや新規事業を進めることが重要である。

1.5.1 大学生生活に必要な商品を提供する事業

大学生協では食品・飲料をはじめとして、学内や自宅・アパートなどで日常的に消費するものから、サークル活動などの課外活動に必要なスポーツ用品や理工系の実験に必要な白衣などの教材、また日常的に使用する文房具やPCサプライに至るまで、日常の生活を支える学内のコンビニエンスストアとして様々な商品を提供している。

特に、コープ商品はフィルム紙の大学ノートを開発して以来、全国の連帯の力で「大学に必要なオリジナリティ溢れるさまざまな商品」を組合員と共に開発してきた。また、自分たちが使いたくなる文房具や日用品を組合員と共に選定し、話題のある、組合員の経験の集まる店舗を作る活動も行われている。

図 1-7 大学生協の店舗の様子



出典：全国大学生協連 HP

1.5.2 学生総合共済

全国の学生組合員のうち、1年間に入院・通院を経験する学生は決して少なくない。そこで学生同士のたすけあいの力で、健康で安全な組合員の生活づくりを進めるために学生総合共済は生まれたのである。1981年にスタートし、加入者が増えるなかで制度改革の討議を重ね、加入者は67万人（2008年度）、年間の給付件数は3万4660件、給付金額は23億9000万円（2007年度）となっている。また、多くの会員生協では、給付事例をもとにその後の提案活動を話し合う給付審査会が進められている。

これら以外にも、新生活サポート事業、資格取得支援、就職支援事業、生協設立支援活動、環境保全活動など、大学生協では数多くの事業・活動を行っている。

1.6 学生委員会とは何か

学生委員会とは、大学生協の組織部に属する学生が主体的につくる生協の組織である。理事会の「補助執行組織」として位置づけられる。主に1～3年生の学生で構成されており、学生の生活を捉えながら活動を行っている。ときには他大学の学生委員会との交流や学びあいの機会（セミナー）をもち、活動や組織運営などに活かしている。かつては明治大学消費生活協同組合のように左翼活動・過激派活動に従事する団体も見られたが、そのような団体は徐々に減ってきており、近年ではほとんどみられない。現在では生協職員に代わって学生向けの活動を行うなど、学生と大学生協をつなぐパイプとしての役割を担っている。活動の一例として、新入生歓迎オリエンテーションやオープンキャンパス、受験生対策活動などがあり、そのほか日常的にも理事会への参加や大学生協における販促活動などを行っているなど、年間を通して様々な活動を行っている。

第2章 大学生協の歴史

2.1 学生は学生の店へ（1898～1944年）

1898年、同志社大で消費組合が結成されたのが大学における最初の協同組合といわれている。第一次世界大戦後、消費組合の本格的な運動の展開に影響され、学園における消費組合運動も活発化していった。1926年に賀川豊彦らの援助を受けて、東京学生消費組合が発足し、早稲田大・拓殖大・東大赤門・立教大・明治大・明治学院それぞれに支部がつくられた。こうした学消の店はその多くが大学の近所に自分たちの資金で建てたもので、「学生は学生の店へ」というスローガンのもとに運営が行われ、それから全国各地に学生消費組合がつくられるようになり、全国学生消費組合連盟が結成された。

しかし、日本の軍国主義化のなかで言論・思想・文化・教育の統制が激しくなり、同時にインフレの進行と資金不足のなか、1937年を中心として相次いで支部が解散し、最後に残った東大赤門支部も1939年に解散させられたのである。その後1943年の「学徒出陣」によって多くの学生が戦場に駆り出され、再び学園に戻ることはなかった。

2.2 学ぶことは食うこと（1945～1950年）

戦争が終わり1945年9月、大学・高専は授業を再開したが、深刻な食料不足と戦災による校舎の消失などによって「食料休暇」が出され、事実上の休校が続いた。このような「学ぶことは食うこと」の状態のなか、多くの大学・高専で戦後最初の学生大会が開かれ、多くの生協や共済会がつくられた。こうしてできた生協は供給物資の獲得のために相互に協力し合い、その連帯活動を土台に1947年「全国学校協同組合連合全（全学協）」が結成さ

れた。当初の事業は食堂と書籍が中心であったが、1949年に全学協を中心とした運動によって購買部門が確立された。しかしその後の経済の再編と学制の改革によって、まだ十分な力を持っていなかった大学生協は組織的にも経済的にも急激な危機に陥り、わずか1年の間に次々と休止・解体し、20生協足らずを残すのみとなった。

2.3 衰退から再建へ（1951～1960年）

1953年の全学協大会で「よりよき生活と平和のために」のスローガンを採択して再建の確認をした。1955年以降、生協は共同仕入や業務改善をすすめ、また組織の整備を行い、利用結集を高めながら学内での地位を高めた。同時に生協法に基づき法人格を取得、全学協も1957年法人化を果たして「全国大学生生活協同組合連合会（全国大学生協連）」となった。

この時期、大学では書籍再販問題などを契機に全国的に消費者の権利を求める運動が広がっていった。そうした運動の成果をもとに、1956年に比叡山で行われた全学協大会では、「教育環境整備運動の推進」「消費者運動」「平和と民主主義を守る運動」の3つの大学生協の基本的な課題を明らかにした。また同時に共同仕入のための全国事業委員会の発足、人事交流など大学生協の事業力量の強化のための方針も決められていった。

3つの運動課題のもと各大学で様々な運動が広げられ、学内での生協の地位を確かなものとしていった。また、国からの国立大学の生協に対する「国有地である土地建物使用料請求」や「特殊法人化構想」は各大学生協や連帯の力によって阻止し、大学生協を守ったのである。

2.4 組合員の様々な要求を基礎に（1961～1972年）

大学生協は1960年以降5年間の間に35の大学生協がつくられ、また多くの大学で新しい福利厚生施設の拡大も実現した。

大学生協間の地域的な事業連帯組織も構想され、東京・京都に同盟体（事業連合の前身）がつくられた。生協は総代を中心とする組合員自身の運動を強化して、組合員の要求をひとつひとつ実現していく取り組みを強化し、施設の拡大・改善を実現し、大学の中での地位の向上がはかられた。

一方、大学政策や運営への学生たちの不満が1960年代後半に入り爆発し、全国の大学で「学生運動」が起こった。生協も大学の封鎖や一部学生の店舗への襲撃などで一時的にダメージを受けたが、その後の組合員の力で克服した。またこれらの「学生運動」の問題が大学生協にも反映し、連帯活動における暴力問題なども発生、不団結を生む要因ともなったのである。

1970年代に入り、地域的な事業連帯は東京・京都・札幌で「事業連合」というかたちで、法人格を所得し、大学生協の経営強化に大きな役割を果たした。

2.5 学園に広く深く根ざした生協を目指して（1973～1979 年）

1973 年、石油ショックを機に日本の高度成長は終わり、消費者の生活は苦しくなった。大学生協は組合員の生活を守る活動に力を入れて取り組み、そうしたなかで、事業活動を組合員の要求に沿って改善することが大学生協の運動にとって不可欠な任務であり、それをもとにして「生協ならでは」の活動を強めることが 1973 年度の総会で確認された。

大学生協の果たす役割は社会的にも認められるようになり、1975 年には国会で「大学生協育成」の請願が全会一致で採択されるまでになった。全国大学生協連は、1977 年の通常総会で「学園に広く深く根ざした生協」を目指して、全国の大学生協が力を合わせて前進することを確認した。1979 年には組合員の生活を守るために、当時導入されようとしていた一般消費税を他の消費者団体などと共に多くの署名を集め導入を諦めさせたのである。

2.6 新しい協同をめざして（1980～1990 年）

1980 年の通常総会では 1977 年の「学園に広く深く根ざした大学生協づくり」以降の実践をうけて、1980 年代前半の大学生協運動の指針として「大学生協の役割と当面の課題」を決定した。それ以降、全国の大学生協では「組合員の声」活動が活発に取り組まれた。また教職員組合員を大幅に増やし、学生のみではなく全大学構成員に貢献していくことを目指す「学生生協から大学生協へ」の努力がなされた。1981 年には健康で安全な組合員の生活づくりを学生同士で支え合うことを制度化した学生総合共済がスタートした。

一方、生協の発展のなかで中小小売業者との軋轢が生じていることを理由に始まった「生協規制」の動きが 1985 年から急速に強まった。これに対し全国の生協組合員や様々な消費者団体などの運動が広がり、生協への理解を広めることで、「生協規制」を阻止し新たな発展を準備する取り組みが進められていった。

1986 年、それまでの大学生協の運動の経験を振り返り、21 世紀に向けた大学生協の展望を示した「新しい協同をめざして」が採択された。それ以降、「魅力ある大学づくりに貢献する大学生協」というスローガンのもと、たくさんの組合員の参加によるクラス活動や様々な委員会活動が広がっていった。大学生協の事業も様々な形で発展し、事業連合は全国各地に結成され、事業革新が進められたのである。

2.7 共感されるビジョンづくりと実現（1991～2003 年）

1990 年代に入り、カリキュラム革命、大学間の単位互換制度、大学運営面での変化など、大学の変化は非常にダイナミックなものになり、大学生協もこの変化に対応していくことが求められた。

1992 年 ICA 東京大会では、「協同組合の基本的価値」「環境と持続可能な開発」のテーマで世界の協同組合人が集まり議論が行われた。日本の大学生協では「協同組合の価値」「協同組合原則の改定」に関する討議と共に「21 世紀委員会答申」「大学生協の 21 世紀へ向けたビジョンとアクションプラン」の討議・策定が進められた。これらは、大学生協の目指

すものと実現のための生協運営の在り方をアクションプランまで明示するものであった。

「大学生協の 21 世紀へ向けたビジョンとアクションプラン」を受けて議論された「大学生協の経営評価基準策定委員会答申」では、「大学生協の経営の目的は、ビジョンの実現にある」と述べられている。現在、大学を取り巻く社会情勢の急激な変化に伴い、大学で生活するすべての構成員の生活と意識は変化を余儀なくされており、同時に大学生協の経営においてもこれまでの経験やマニュアルに頼ったやり方では打開できない厳しさのなかにあった。このような状況だからこそ見失ってはいけない協同組合の価値を再確認し、変化の時代に合った生協運動を進めたのである。

2.8 個性輝く大学生協を目指して（2004～2006 年）

2004 年 4 月より国立大学の法人化がスタートし、この法人化は戦後いくつかある大学改革のなかでも最大の改革となった。大学の評価結果が運営費交付金に影響するようになり、18 歳人口の減少などで私立大学との競争に拍車がかかるなど、2004 年は大学改革という点でも大きな節目の年になったのである。

大学生協は「個性輝く大学を支援する大学生協づくり」「たすけあい、学びあい、コミュニティづくり」「学生の元気が大学の元気」を活動の柱にすえ、各大学の発展に大学生協が貢献し、学生たちの活力を育み、魅力ある大学づくりを大学と一体となって進めていった。

法人化を契機に、大学が民間市場に開放されつつあり、国内の大手チェーンストアや外食産業がキャンパスの中で店舗開設する動きが強まりつつあるなかで、大学生協もその競争の流れに巻き込まれつつある。

2.9 大学生協の今後（2007 年～）

「消費生活協同組合法の一部を改正する法律案（生協法改正法案）」が 2007 年に参・衆議院本会議においていずれも全会一致で可決され、成立した。1948 年の制定以来、59 年ぶりに抜本的・総合的に改正され、2008 年 4 月から改正法が施行された。

改正生協法をふまえ、共済事業の分離を含め今後の連合会組織や全国連帯の在り方について検討する全国理事会の諮問機関「連合会のあり方検討委員会」は 2007 年 1 月答申を提出した。

新たな保険との競争や、大手コンビニチェーンの大学キャンパスへの参入などの動きのなかで、大学生協は大学や組合員との連帯などの大学生協の特長・強みを前面に押し出した活動がこれまで以上に求められている。

第 3 章 学生生活と大学生協

大学生協は組合員からの出資金をもとに活動を行っており、利益を追求することを目的としない非営利団体であるため、そのぶんを組合員に「還元」する活動を日頃から行って

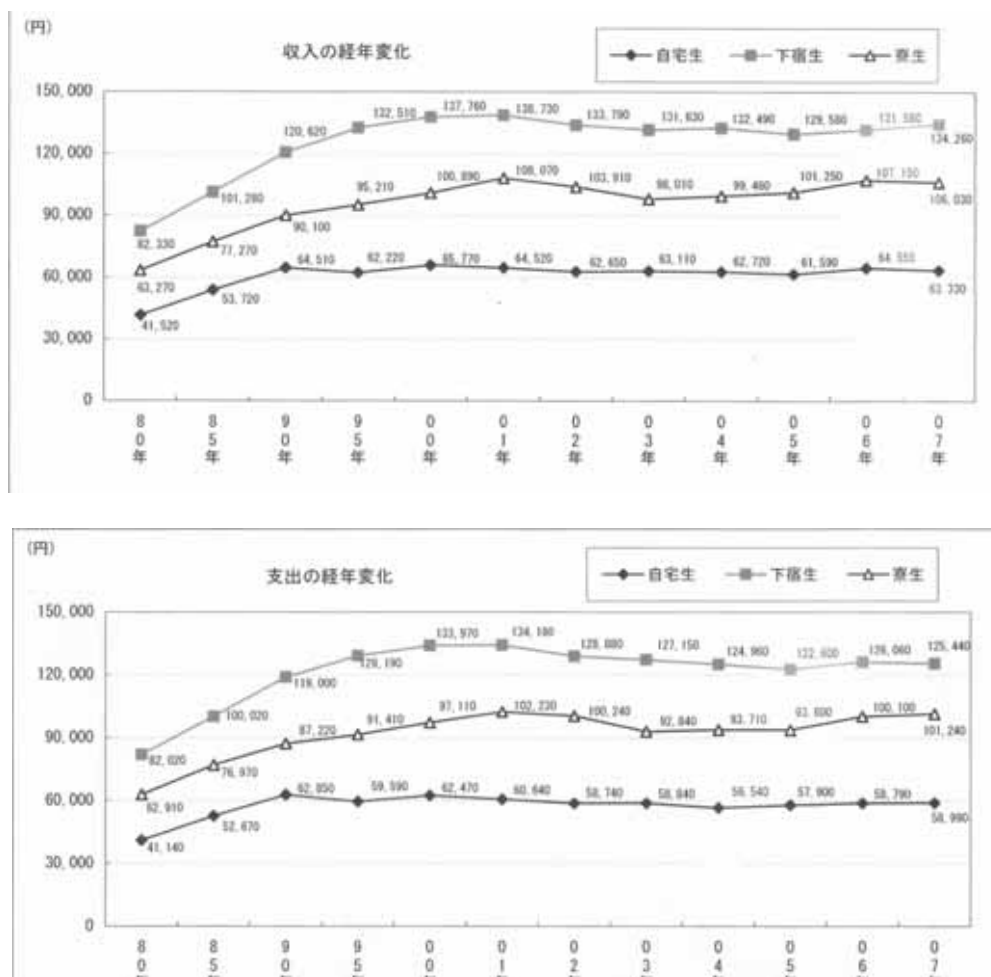
いる。大学生協における組合員とは9割が大学の学生であり、ほかは大学の教職員などで構成されているため、大学生協の日常的な活動はいかに学生に「還元」するかの活動であるといっても過言ではない。では大学生協のその活動は実際にどのような活動を学生生活に与えているのであろうか。

3.1 大学生の学生生活の実態

はじめに、大学生協の学生生活に与える影響をみるうえで現在の大学生の学生生活の実態について把握しておく必要がある。ここでは、大学生の衣食住や消費生活などについて項目ごとに大学生の日常生活をみていく。

3.1.1 収入・支出

図 3-1 大学生の収入・支出の変化



出典：CAMPUS LIFE DATA 2007

1ヵ月の収入合計は自宅生 63330 円、下宿生は 134260 円、寮生 106030 円となっている。

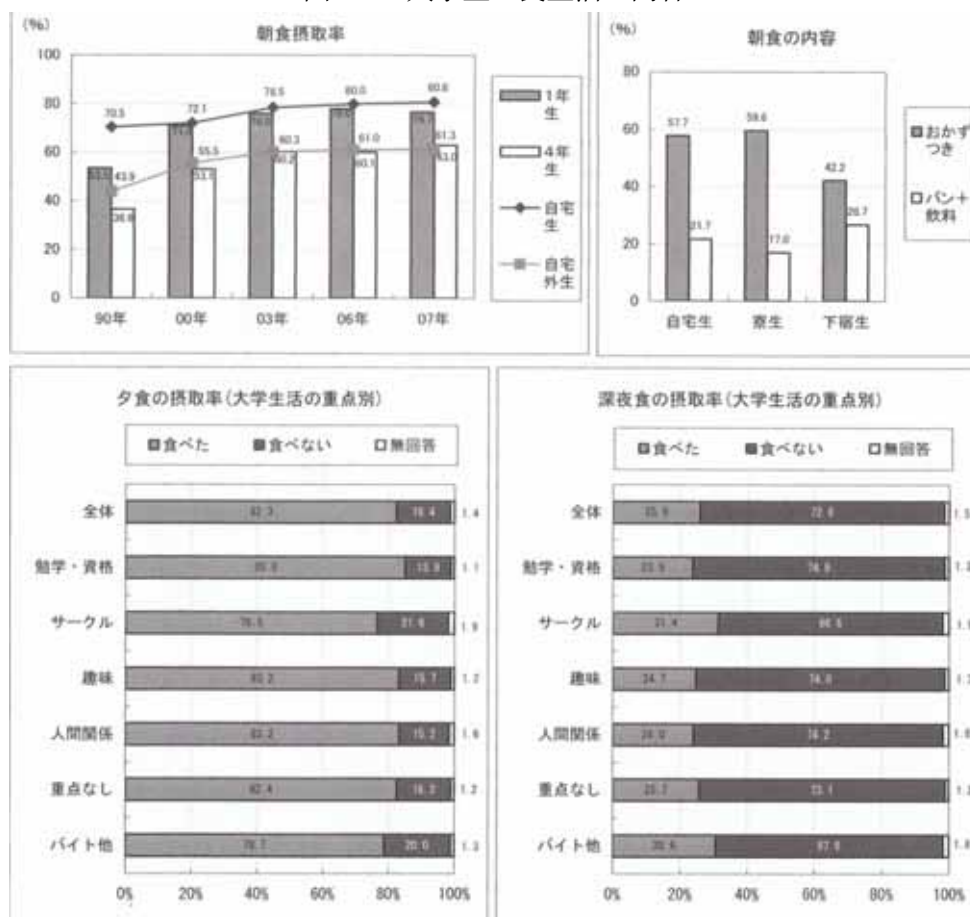
自宅生、下宿生ともに減少、2002 年以降増加していた奨学金は自宅生で 30 円減だが、下宿生は 1240 円増となっている。また、アルバイト収入は自宅生、下宿生ともに引き続き増加傾向である。特に 1 年生はアルバイト就労率が 2 年前と比較すると増加しており、1 ヶ月あたりの収入も増加している。

1 か月の支出合計は自宅生 58990 円、下宿生 125440 円、寮生 101240 円となっている。自宅生が「貯蓄・繰越」で 2360 円、「その他」で 150 円増の他は各費目とも減少している。下宿生の支出は「食費」「住居費」「交通費」などで若干増加したが、目立った変化はみられない。

収入・支出ともにここ数年で大きな変化はないものの、下宿生・寮生のアルバイトの就労率が上がっていることから、仕送りの減少分をアルバイトや奨学金で補いつつ生活を送っているといことがわかる。

3.1.2 食生活

図 3-2 大学生の食生活の内容



出典：CAMPUS LIFE DATA 2007

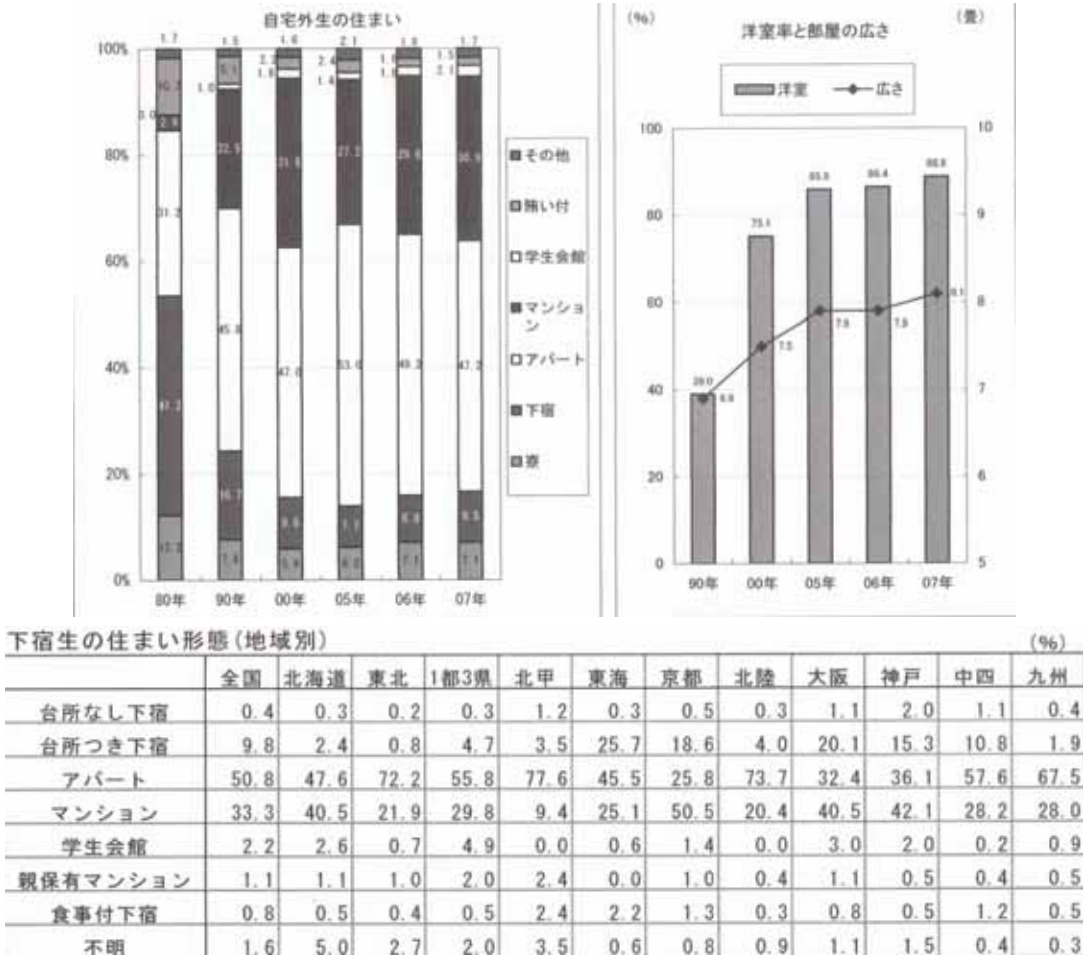
普段の日の朝食の摂取率は自宅生 80.8%、自宅外生 61.3%で、自宅外生については 90

年と比較して 17.4%増となった。学年別に見ると 1 年生が最も高く、学年が上がるほど朝食の摂取率は低くなる傾向がある。また、食べた人を 100 とした時の朝食の内容は「米飯＋おかず」「パン＋おかず」という人が自宅生 57.7%、寮生 59.6%に対して下宿生は 42.2%と少なく、「パン＋飲料」で済ませる人の割合が 26.7%と、自宅生 21.7%、寮生 17.0%と比較して高い。

2007 年の下宿生の夕食摂取率は 2001 年比 3.7%減少の 81.8%で、食事場所も自宅で食べた人の割合が 65.1%から 59.5%へと減少している。さらに、大学生活の重点が「サークル」の人は 2007 年の夕食の摂取率は 76.5%と低い、深夜食は 31.4%と平均より 5.5%高い。大学生活の重点が「アルバイト他」の人も同様の傾向が見られ、夕食 78.7%で平均より 3.6%低く、深夜食 30.6%と平均より 4.7%高い。

3.1.3 住居

図 3-3 大学生の住居の現状



出典：CAMPUS LIFE DATA 2007

自宅外生の住まいは「寮」7.1%に対してアパートなどの「食事なし下宿」が 91.4%とな

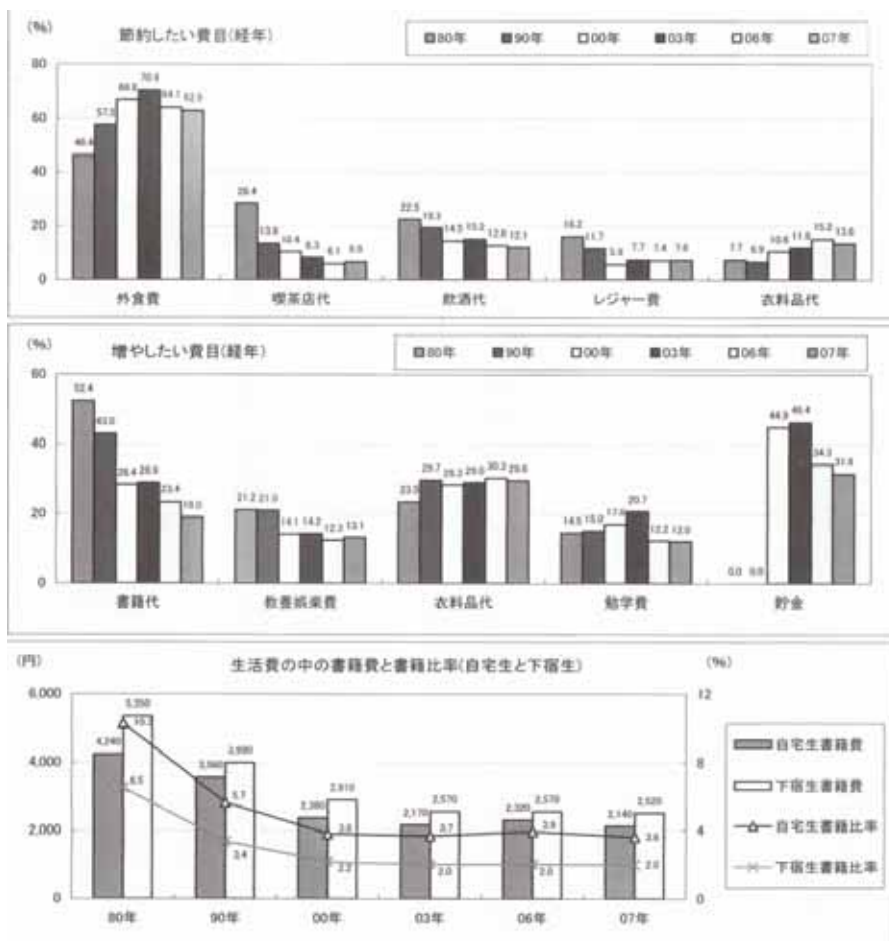
っており、「食事付き下宿」については1980年には10.7%だったが2007年は1.5%にまで減った。1980年には12.2%だった「寮」については2000年に5.9%まで減ったが、2007年は7.1%と一定の比率を保っている。

全国平均の「アパートなど」の下宿生の内訳は「アパート」50.6%、「マンション」33.3%、「台所つき下宿」9.8%だが、この構成は地域差が見られ、東北や北陸では「アパート」が7割を超えるが、京阪神では「マンション」の比率が高い傾向がある。また「台所つき下宿」は東海地域では25.7%とマンションとほぼ同じ構成を示している。

マンションの構成比増加に伴い、居室が洋室のタイプはこの10年で64.9%から88.8%になり、専用バスも下宿生を100とした場合93.5%を占めるようになった。

3.1.4 消費生活

図 3-4 大学生の消費生活



出典：CAMPUS LIFE DATA 2007

節約したい費目は「外食費」62.9%が最も高く、次いで「嗜好品」19.2%、「衣料品代」13.6%の順に高い。「外食費」は毎年6割以上が節約したいと答えているが、2003年以降は

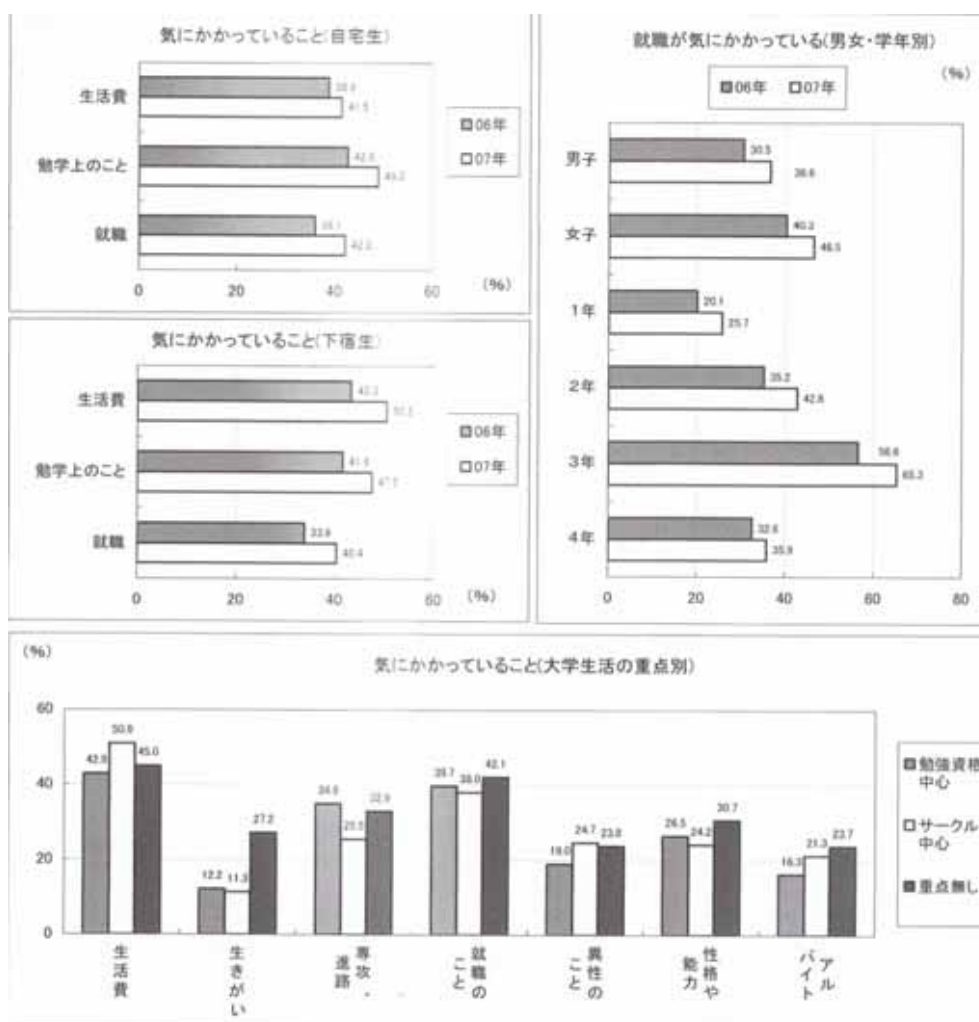
減少傾向が続いている。

増やしたい費目は「貯金」31.6%、「衣料品大」29.6%が高く、「書籍代」19.0%が続く。増やしたい費目としての「書籍代」は2006年より4.4%減少、1980年と比較すると33.4%減少している。

「貯金」の割合がここ2年で10%以上下がってはいるものの、依然として大学生の貯金に対する意識が高いことがわかる。また、「書籍代」は1ヶ月の生活費でも1980年と比較し、自宅生2100円、下宿生2830円減っており、学生の「書籍代」への関心は年々低下しているように思われる。

3.1.5 日常生活で気にかかっていること

図 3-5 大学生の日常生活で気にかかっていること



出典：CAMPUS LIFE DATA 2007

日常生活の中で日頃悩んでいることや気にかかっていることは、「授業・レポートなど勉

学上のこと」48.2%、「生活費やお金のこと」46.5%、「時間がたりないこと」31.6%、「専攻分野や進路のこと」30.4%の順に多い。「生活費やお金のこと」は、下宿生で2006年より7.2%増えている。これは1ヶ月の「仕送り」の平均額が減少していることなどが原因として考えられる。

「就職のこと」は学年別で最も高い3年生が65.3%であったが、これは2006年と比較し8.7%増加している。また女子の数値も2006年から6.2%と増加傾向にある。

大学生活の重点で「特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活」や「特に重点がない」と答えた人は「勉強」「資格取得」「サークル」を重点とした人より、日常生活で気にかかっていることが多い傾向にある。

3.2 大学生協の活動と学生生活へのはたらきかけ

先ほども述べたように、大学生協は非営利団体であり、組合員への「還元」を目的として活動している。大学生に対するその活動の基本理念は「大学生の学生生活をサポートする」ことにある。北海道教育大学釧路生協の専務理事は、「大学生協の基本は学生のサポートをすることにあります。確かにあまり表だって派手な活動はしていませんし、学生生活に大きな変化を与えるようなことは珍しいです。学生のなかには『あって当たり前』というような認識があるのも事実です。ただ、逆にその『当たり前』のものが無くなってしまうと学生が困ってしまうのもまた事実だと思います。ですから、その当たりのことを当たり前に行い、さらに少しでも学生の役に立てる活動を行うこと、それが私たち大学生協の役割であると考えています。仮にその活動が学生の普段気付くことのない水面下の活動であったとしても、それを確実にやっていくことが大事なのです」（2009年1月6日 釧路生協の専務理事からの聞き取り）と語っている。この言葉からもわかるように、大学生協は「学生のために」という想いのもとに日頃から活動しているのである。

3.2.1 大学生協の活動

大学生協の活動で学生に最も身近なのが、購買・食堂業務である。この購買・食堂業務こそが、学生が「あって当たり前」だと考えている大学生協の活動の代表であるといえる。

普段学生が特別な意識をもって購買・食堂を利用することはあまりないが、釧路生協の専務理事が語ったように「ないと困るもの」であることは事実である。また大学生協の購買・食堂の特長として、商品を通常よりも安値で販売しているというのも挙げることができる。これは組合員への「還元」という観点からのものである。大学生協では独自ブランドの商品開発も行っており、大学生に合ったより良い商品を数多く安値で販売している。商品安値で提供することによって組合員、すなわち学生が利用しやすい環境をつくり、学生の消費生活に少しでも良い影響を与えようという考えに基づくはたらきかけである。利益を追求せずに組合員のことを第一に考えているのである。

3.2.1.1 大学生のニーズに合わせた商品の販売

大学生協は主に学生を対象に購買事業を行っているため、学生のニーズに合わせた商品を常に販売している。一例として、文房具などはもちろんのこと、授業で利用する書籍・参考書、パソコンの OA 商品、実験で利用する白衣などがある。特に授業で利用する書籍・参考書の販売に関しては力が入れている。大学の前・後期の授業が始まる前に、大学の教員から授業で使用する書籍をあらかじめ聞いてリストアップし、その全てを購買で販売している。さらに、組合員証の提示があった場合には書籍の割引も行っている。また、オンラインによる書籍・CD・DVD の販売も行っている。学生からの要望があった商品もその都度必要に応じて仕入れている。これらの商品を取りそろえ、安値で販売しているのである。

3.2.1.2 栄養バランスを考えたメニューの販売

大学生協の食堂メニューは、学生の健康面に考慮し栄養バランスの良い商品を取りそろえている。自宅外生の朝食摂取率が低いことや、学生の食生活が偏りがちなことなどを踏まえ、大学生協の食堂では栄養バランスの整ったメニューを販売している。

ほかにも、期間限定メニューの販売や、九州・沖縄フェア・クリスマスフェアなどを時期に応じて開催し、バラエティに富んだメニューを販売している。各地域や大学生協ごとにオリジナルメニューもある。グランドメニューについてもいつも同じメニューを出すのではなく、一定期間毎にメニューを入れ替えるなどして、学生が飽きることなく食堂を利用できるような工夫がこなされている。

3.2.1.3 旅行代理店事業

大学生協では全国大学生協連旅行センターや各地域の事業連合が中心となり、旅行代理店事業を行っている。学生向けの様々な国内・海外パック旅行の紹介・予約受付はもちろんのこと、格安航空券の予約や、JR・高速バスなどの各交通機関の券も格安で販売、宿泊ホテルの予約なども行っている。さらにそれだけではなく、学生生活の支援の一環として、語学研修スクールガイドによる個人語学研修、語学研修留学、語学研修ホームステイを目的とした語学研修パッケージの斡旋も行っており、その際に必要な国際学生証「ISIC カード」の発行や海外旅行・留学保険の契約もすることができる。学業目的ではない海外フリーツアーもある。また、学生が旅行先での緊急事態などで困った時に対応するために、学生が利用することのできる『CO-OP デスク』をインターナショナルアシスタンス社と提携して設置している。この旅行代理店事業によって、さらなる学生生活の充実を図っているのである。

3.2.1.4 学生向け住居の斡旋

大学生協では学生向けに住居の斡旋も行っている。学生が必要とする住居の形態はその

学生ごとに異なるのはもちろんのこと、地域によっても大きな違いが出てくる。そういった学生のニーズに対応するため、大学生協では地域に応じた物件を取り扱い、学生や保護者と話をする機会を設け、その学生の希望に応じた最適な住居を斡旋する事業を行っている。取り扱っている物件は幅広く、一般的な賃貸アパートや学生向けの下宿、さらに地域によっては「大学生協オリジナルマンション」という大学生協がつくった組合員専用マンションがある。このマンションは学生向けにつくられており、電気蓄熱暖房機の完備や徹底した防犯・防災設備など、より充実した住居環境が整えられている。これらの住居を学生向けに斡旋しているのである。

また住居斡旋の際には、ひとり暮らしには必須の学生総合共済（生命共済、火災共済、学生賠償責任保険）の紹介も同時に行っている。

図 3-6 住居斡旋の様子



出典：大学生協 REPORT2008

3.2.1.5 学生相談窓口の開設

大学生協では、学生向けに「学生相談窓口」を開設している。学業のことや生活のこと、進路のことやプライベートなことにいたるまで、学生が普段気にかけていることについて専門の相談員が相談に乗るというものである。主に大学生協の店舗内で毎週定期的に開設されていることが多く、学生が話をしやすい環境を整え、相談員が学生の相談に丁寧に応じることで一人でも多くの学生の不安を解消することを目的としている。

3.2.1.6 パソコンスキル向上支援

現在、大学生の学業においてパソコンは必要不可欠なものとなっているが、全ての学生がパソコンを十分に使いこなせるわけでない。そんな学生に対応するため、大学生協ではパソコンスキル向上支援を行っている。各大学完結型で専門講師・学生講師によるパソコン講習会を希望学生に対して開催し、パソコン本体の基本操作やレポートの作成に必要な Word・Excel の操作方法など、短期間の間に基本的なパソコンスキルについて学習できる活動である。

また、大学生協オリジナルの学生向けパソコンセットの販売や、購買における OA 商品の充実なども行っている。

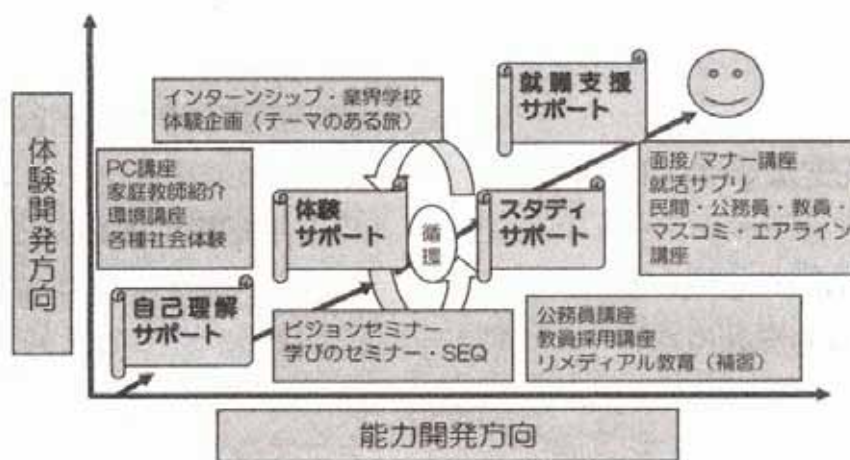
3.2.1.7 学生キャリア形成支援事業

2001 年頃から大学生協で取り組んでいる「学生キャリア形成支援事業」とは、学生の学びと成長を 4 年間通じて支援する活動であり、その範囲は図 3-7 のようになる。その目的は「学び合いと協同体験を通じて学生自らの主体形成を総合的にサポートすること」であり、言い換えると「生き方と働き方」を学生自らが決定できるように支援することである。

学生キャリア形成支援事業の内容は大きく 4 つに分類することができる。

- ・自己理解サポート：ビジョンセミナー、スチューデント EQ の提供
- ・スタディサポート：各種学内講座の提供
- ・体験サポート：社会体験・アルバイト紹介・テーマのある旅・インターンシップの提供
- ・就職支援サポート：就職セミナー・各種就職講座の提供

図 3-7 学生キャリア形成支援プロセス概念図



出典：生活協同組合研究 No.385

この 4 つの分野は、4 年間の大学生活のなかでそれぞれの時期に応じた支援活動を行うためのものである。

この事業の特徴は、スタディガイドや専門業者との提携の方向ではなく、大学生協オリジナルの講座の開発から就活セミナーにいたるまで、全てが大学生協独自で展開していることである。業者に委託するのではなく、自らの事業として学生組合員と共に取り組んでいくことで、学生のニーズに応じたより深い学生の支援を目指しているのである。

3.2.2 大学生協の学生生活へのはたらきかけ

大学生協の大学生に対する活動の最も基本的なところは「大学生の学生生活をサポートする」ことにある。それはすなわち、前述したものに代表される活動によって大学内の福利厚生を充実していくことである。組合員である大学生はもとより、大学側の生協への期待の基本はここにあり、大学生協が組合員や大学に信頼される基礎でもある。

協同組合は非営利の活動組織であるというのが基本である。大学生協は、戦後本の割引供給・安価な食事の提供・ノートなど物資の確保から活動を始め、その後も変化する組合員のニーズを受けとめながら、総合的に活動分野の拡大を図ってきた。そのような活動の拡大を今日の組合員のニーズからもとらえ直す必要があるのである。

学生生活においては、学生が「あって当たり前」と考えている購買・食堂業務の充実などに代表される学内での活動や、学生向け住居の斡旋や学生総合共済の提供などに代表される学内以外にも関連する活動などがある。こういった活動によって学業や私生活の充実、つまり学内外問わず学生生活を充実させていくことに貢献することこそが、大学生協から学生生活への最も大きなはたらきかけであるといえる。

第4章 北海道教育大学の大学生協における学生へのはたらきかけ

4.1 北海道教育大学5生協の事業概要

北海道教育大学5生協の主な事業内容としては、以下の4つが挙げられる。

- ・物品供給事業：書籍、文具、写真、コピー、情報機器、電気製品、家具雑貨、食料品、たばこ、その他組合員の日常生活に必要な物資を供給する事業
- ・サービス提供事業：国内・海外旅行などの旅行業務を取り扱う事業、アパート・下宿の賃借、斡旋および管理をする事業、その他日常生活に必要なサービスを提供する事業
- ・食事提供事業：組合員に食事を提供する事業
- ・共済事業：組合員のための生命共済、火災共済を受託して行う事業

北海道教育大学5生協は大学生協のなかでも小規模ではあるものの、日常的に行っている事業内容に他の大学生協と大きな違いはないといえる。そのほかでは、2005年に定められた環境方針に従って各分校でリサイクル活動やレジ袋削減キャンペーン、グリーン購入法に適合した商品の販売などを行っている。

各分校の組合員数や供給高からも北海道教育大学5生協が小規模であるということが見てとれる。

北海道教育大学5生協の組合員加入率は各キャンパスで多少の差はあるものの、全学生・教職員のうち約8割～9割弱が組合員に加入している。北海道教育大学5生協では、組合員の加入に対しては学生の入学時に関連資料・パンフレットを送付するのみとなっており、その他に特別な組合員加入促進活動は行っていない。そのため、全ての学生・教職員が加

入するまでには至っていないのが現状である。

表 4-1 北海道教育大学 5 生協の 2007 年度事業実績			
	組合員数（名）	供給高（千円）	経常剰余（千円）
札幌	1352	156294	-1027
旭川	1349	154458	2186
岩見沢	784	84488	2143
函館	1340	117036	6929
釧路	1006	98133	2749

供給高を購買部門と食堂部門に分けて見ていくと、全てのキャンパスが供給高の多くが購買部門に偏っていることがわかる。最も割合が高い旭川生協で、供給高全体に対する購買部門の割合が約 88.24%、最も少ない釧路生協でも約 81.03%となっている。この原因としては購買で扱う商品の単価が大きいということもあるが、最近の学生が購買やコンビニエンスストアで軽食を購入する傾向が高くなっていることや、食堂の利用できる席数が少ないこと、食堂の利用時間が短縮されていることなども挙げられる。

大学生協は利益を追求しない非営利組織であるため、経常剰余は必要最低限に抑えられている。ただ、北海道教育大学 5 生協のような小規模大学生協では「利益を追求するべきではない」というのと「組合員への『還元』をしなくてはならない」との両立が難しく、赤字経営に陥りやすい傾向がある。2007 年度の札幌生協は赤字を計上しており、旭川生協では 90 年代に赤字経営が続いていた。

4.2 北海道教育大学 5 生協の事業・活動について

北海道教育大学 5 生協の事業・活動については、日常的な購買・食堂業務については一時的に赤字に陥ることはあるものの、組合員に対する必要最低限の水準は維持できているといえる。ただ、維持することはできているものの、それ以上に積極的な活動があまり行われていないのが現状である。それを象徴する報告が旭川生協の 2008 年度通常総代会議案書に記載されている。

新入生歓迎オリエンテーションやオープンキャンパスなどのように学生委員会が主導で行われる企画・活動は多くあるものの、北海道教育大学 5 生協が主導となって行う独自の企画・活動となると目新しいものはなく、さらに組合員である学生に対してはたらきかける企画・活動となるとほとんどないといっている。北海道教育大学 5 生協においては、学生に対する企画・活動のほとんどを学生委員会に一任している状況である。また、事業・活動のなかには組合員や大学生協そのものに大きく影響を及ぼすものもある。

表 4-2 北海道教育大学旭川生協 2008 年度組織活動報告

(1)組合員のニーズに合った活動をするために、ニーズを探す取り組みを強化し、より組合員に近い存在になることを目指します。

07 年度は、恒例の企画・イベントが中心でしたが、組合員に楽しんでもらえる活動を行ってきました。ですが、振り返ってみると、組合員のニーズに合致した活動ばかりであったとは言い切れません。また、「ニーズを探す」という工夫はまだまだ足りなかったと考えています。～中略～ 組合員の声カードの PR 不足、機関誌の発行回数の減少などもあり、組合員のニーズに歩み寄ることが不足していました。今後は、企画ごとのアンケートを活かすことを含め、改めて組合員のニーズを尊重する姿勢に立つことが求められていると考えます。

(2)よりよい活動を目指して、「共につくる活動」に向けて動き出します。

組合員と共に作る活動という点においては、一昨年度同様、オープンキャンパスや新入生歓迎オリエンテーションなどで実現できました。～中略～ しかし、目標としていた企画構想段階での組合員との協力は実現できず、こちらの作った企画に参加・協力していただけたことになってしまいました。今後は、更なる組合員の参加・協力を実現すべく、大きな企画だけでなく、普段から組合員の参加を意識し、より組合員に近い活動を行っていきたいと思います。

出典：北海道教育大学旭川生協 2008 年度通常総代会議案書

4.2.1 北海道教育大学 5 生協の事業・活動による影響

・共済加入率の低下

北海道教育大学 5 生協における組合員の共済加入率は、ここ数年、年々減少している。最も減少しているのが札幌生協である。2004 年度の時点で 50%を超えていた加入率が、2007 年度では 30%近くまで減少している。最も高い加入率の高い釧路生協であっても、2004 年度の 91%から 2007 年度は 80%まで、10%以上減少している。札幌の場合は学生の一人暮らしの割合が他の分校に比べ低いなどの理由もあるが、それ以上に全キャンパスにおいて急激な加入率の減少が進んでいる。

その背景には、共済加入促進活動があまり行われていないということがある。大学生協側が組合員に共済についての説明などを行う場面といえば、住宅斡旋を受けにきた学生・保護者に対して斡旋と同時に共済の説明を行うぐらいであり、そのほかの組合員は入学時の送付資料の中に共済の資料・パンフレットが同封されているだけである。共済の説明がほとんど行われていないがために、年々加入率が減少しているといえる。

また、「学研災付帯学生生活総合保険（付帯学総）」の制度開始も影響している。付帯学総とは、(財)日本国際教育支援協会の学生教育研究災害傷害保険が取り扱っている保険である。付帯学総は学研災では補償が不足すると思われる際に任意で追加できるものであり、その補償内容は学研災のみの場合よりも非常に充実している。この付帯学総の制度開始が

共済加入率の低下の一因ともなっている。

・食堂営業時間の短縮

札幌生協以外の4つの大学生協では食堂の営業時間が短縮されている。札幌生協ではAM10:00からPM6:00まで営業しているが、他の生協では多少違いはあるものの、AM11:00から営業しPM3:00まで、早いところではPM2:00までしか営業していない。

営業時間を短縮する理由としては、学生の食堂の利用時間が昼に集中することがある。昼食時には席が足りなくなるほど利用者が来るが、それ以外の時間となると利用者はそれほど多くはない。そのため、人件費削減などの点から利用者の少ない時間帯の営業を止めたのである。

しかし、この営業時間の短縮は学生にとっては逆に不便である。昼食時に食堂に向っても、食堂の席数が多くないため、授業の終了が少しでも遅れてしまうと既に満席になっており、利用したくても利用できない状況になってしまっている。仕方なく次の授業が終了した後に利用しようと考えても、その時間には営業が終了してしまっているのである。

学生が利用しやすい環境を整えることを考えるのであれば、食堂の営業時間の短縮は行すべきではないと考える。

・総代会（総会）における出席・本人出席の総代の減少

総代会（総会）とは、大学生協の意思決定のための最高議決機関である。北海道教育大学5生協では、この総代会における総代（組合員の代表）の出席・本人出席の数がかなり少ない傾向にある。

表 4-3 2007 年総（代）会の出席総代数			
	出席総代数	本人出席	書面議決
札幌	84 名	6 名	78 名
旭川	101 名	66 名	35 名
岩見沢	303 名	13 名	290 名
函館	124 名	17 名	107 名
釧路	564 名	24 名	540 名

出席総代数こそ各キャンパスによってばらつきはあるが、注目すべきは本人出席の人数である。旭川生協で66名の本人出席があるものの、その他の生協では軒並みかなり少ない人数である。本人出席とは総代会当日に会場まで来た総代の数であり、つまり札幌校を例にすると、総代会当日は会場に総代が6名しかいないなかで重要事項の議決が行われたのである。書面議決も行っているとはいえども、ここまで人数の少ない総代会が最高議決機関としての役割を十分に果たしているのかどうか疑問である。

ここまで出席人数が少ないのには、各キャンパスによる総代会のPR不足などが原因としてあげられる。そして、学生のなかでの大学生協に対する意識・興味・関心の薄さがこの

数字に表れているともいえる。

4.2.2 北海道教育大学 5 生協独自の企画・活動が活発でない原因

北海道教育大学 5 生協において、独自の企画・活動がほとんど行われていない大きな理由としては 2 つあげることができる。

まずひとつめは、「経営基盤が弱い」、というのがある。前述のように北海道教育大学 5 生協のような小規模大学生協では、「利益を追求するべきではない」というのと「組合員への『還元』をしなくてはならない」とのふたつが原因となり、赤字経営に陥りやすいという現状がある。毎年計上される剰余もそれほど多いわけではないため、独自の企画や活動を行うだけの予算的な余裕がないのである。また、近年の北海道教育大学 5 生協では組合員の大学生協内での消費が伸び悩んでいる傾向にあり、苦しい経営を強いられている。いつ赤字に陥ってもおかしくない状態であるがゆえに、独自の企画・活動に予算を割けないでいるのである。

ふたつめには、「正規職員の数が少ない」、というのがある。大学生協での独自の企画・活動を行うとなると、それを主導するのは当然大学生協の正規職員の仕事となる。大学生協では、食堂・購買などの各部門に一人ずつ店長や主任などの正規職員が配置され、さらにそのうえに全ての部門を統括する専務理事が専従として配置されるのが本来の事業形態である。しかし、北海道教育大学 5 生協のような小規模大学生協となると、正規職員は専務理事のみとなってしまう。そのため、専務理事が食堂・購買などの全ての部門の管理を一人で行わなければならないのである。札幌校の専務理事は、「一日の時間のほとんどを日常業務の管理に費やさなければならないので、とてもじゃないが大きな企画をやるだけの余裕がないんです」（2009 年 1 月 8 日 札幌生協の専務理事からの聞き取り）と語っている。また、札幌・旭川・岩見沢・函館の専務理事においては他の大学生協からの出向となっているため、継続性の点からも問題がある。企画・活動を主導するはずの正規職員に時間的な余裕がないために、独自の活動や企画が行えないでいるのである。

以上のふたつが北海道教育大学 5 生協で独自の企画・活動がほとんど行われていない大きな理由であると考えられる。実際に各キャンパスの専務理事の話を聞いた限りでは、企画・活動を行う気がないわけではない、ということは感じ取ることができた。しかし、余裕がないために行えないでいるのである。独自の企画・活動の必要性をわかっていながらも、それを行えないでいることに歯痒さを感じているのである。

4.3 北海道教育大学の大学生協における学生へのはたらきかけ

これまでの考察を踏まえて、北海道教育大学 5 生協における学生へのはたらきかけについて改めて見ていく。

まず、日常的な購買・食堂業務などにおいて、学生の日常生活や学業面において必要な物資の充実や住宅斡旋活動などの時期に応じた活動によって、他の大学生協と同様に学生

の福利厚生において大きな貢献をしていることは間違いない。この点においては学生たちもある程度感じていることだといえる。多くの学生が大学生協を「物を買うところ」「食事をするところ」などと考えているということは、逆にいえば、それだけ学生のなかで大学生協が福利厚生施設として認識されているということでもある。北海道教育大学 5 生協がこの点においてしっかりと機能している証拠である。

ただ一方で、学生へのはたらきかけはその一点だけにとどまってしまっているという現状もある。日常的な業務以外にこれといった企画・活動を行っていないがために、学生のなかには「大学生協＝購買・食堂」といった考えが定着してしまいつつあり、その結果、共済加入率の低下や総代会の出席数の低下など、それ以外の事業・活動において学生たちが離れていってしまっている。日常的な業務以外にも、こういった事業・活動についての学生たちの認知を広めるような活動をより積極的に行うべきである。例えば、共済は学生向けにつくられた保証内容のかなり充実したものであり、学生が加入して損することのないものとなっている。こういった学生に活用してもらうことでより学生生活を充実することのできるようなものを、今以上に学生の間に広めていくことが必要である。そうすることで、それが大学生協のためになるのはもちろん、なによりも活用してくれた学生のためになるのである。

食堂の営業時間の短縮など、学生が求めている事業までも縮小してしまうような動きがなかにはある。これでは大学生協が学生へのはたらきかけを自ら制限してしまっているようなものである。経営面などで様々な理由はあるかもしれないが、大学生協の事業・活動の原点である「組合員への『還元』」、ここではすなわち「学生生活への貢献」ということを忘れてはならない。

学生に今以上に大学生協を有効に利用してもらい、学生生活をより充実させるようなはたらきかけを行うためには、学生にもっと大学生協を知ってもらえるような活動を行う必要がある。日常的な業務以外の活動の PR、独自の企画や活動の発案実行などがまさにそれである。さらにはそういった企画・活動のなかにおいて、企画段階から学生に参加してもらうなどすることで、大学生協についての理解を深めてもらい、大学生協を学生生活の一部として認識してもらえるように常日頃から努力するべきである。

第 5 章 学生委員会

全国の大学生協の組合員約 148 万人のうち、そのほとんどが学生である。活動目的や出資金の面などからも学生なくして大学生協の活動を語ることはできないというのは当然のことであり、学生がその活動を支えているというのは紛れもない事実である。

最近では大学生協の取り組みや学生が主体的に活動している様子が取り上げられることがある。その理由としては、ここ数年で学生が大学生協の活動にかかわる幅がかなり広がっているということが挙げられる。その活動の中心となっているのが「学生委員会」なの

である。

5.1 学生委員会の活動

大学生協における学生活動の中心となっている「学生委員会」の大きな特徴としては、大学生協の職員に代わり学生向けの活動を行うなど、受験生なども含めた大学生協の組合員に限定されることのない多くの学生、それらと深い関わりのある活動に積極的に参加しているところにある。

活動の例としては、新入生の不安を和らげ先輩としてサポートする新入生歓迎の企画や、学生に対して健康や安全を呼びかけるための食生活相談会や自転車点検などがある。研究室やゼミに所属する学生に向けて冊子を作成・配布する活動や、七夕やクリスマスの時期にあわせて大学生協の店舗内の装飾、試食会などを通じての組合員のニーズにあった大学生協づくりも行っている。また、学生委員会の活動や大学生活での関心ごとなどについて情報発信をし、大学生協の活動に組合員が関わることができるようにするための機関誌づくりやホームページでの広報活動も行っている。さらには、大学生活において夢や目標を見つけ実現することが大切と考え、ビジョンナビゲーションセミナーといわれる企画を行い、大学生活を充実させるための計画づくりや先輩からのアドバイスをもらうことのできる場の提供なども行っている。

学生委員会には全国で約 7000 名の学生が在籍しており、多くの学生が学生委員会として大学生協に関わることで大学生活全般をサポートしているのである。

図 5-1 学生委員会の活動の様子



出典：大学生協 REPORT2008

5.2 北海道教育大学 5 生協学生委員会の活動

ここでは小規模大学生協の一例として、北海道教育大学 5 キャンパス（札幌・旭川・岩見沢・函館・釧路）の大学生協学生委員会の活動について見ていく。

北海道教育大学 5 生協の学生委員会は 2008 年 12 月現在で、札幌校：14 名、旭川校：10

名、函館校 19 名、釧路校 8 名となっており、岩見沢校においては学生委員会がない状況となっている。各学生委員会で行われている活動は大きくふたつに分けることができる。新入生歓迎オリエンテーションなどの年間共通活動と、各学生委員会が独自で行う活動のふたつである。

表 5-1 北海道教育大学 5 生協学生委員会の年間共通活動	
4 月	新入生歓迎オリエンテーション
5 月	総代会（総会）
7 月	オープンキャンパス
11 月	推薦入試受験生歓迎
2 月	前期受験生歓迎
3 月	後期受験生歓迎

表 5-2 北海道教育大学釧路校学生委員会の 2007 年度年間活動	
4 月	新入生協ガイダンス開催 新入生歓迎交流企画 「うえる CoMe☆釧路」開催 組合員証発行窓口開設 パソコン講習会補助 生協新歓レシートクジ準備
5 月	第 27 回通常総会の準備・開催補助 新入生研修歌集『うたほん』発行
7 月	『CAPT PRESS 前期号』発行 生協レシートクジ準備 第 1 回どりーむキャプト宝くじ♪開催 前期分ユニセフ募金送金
11 月	『CAPT PRESS 後期号』発行 灯油情報ポスター掲示
12 月	第 1 回生協杯 クイズ DE ポン！！開催 生協レシートクジ準備 冬期の自転車保管ポスター掲示
2 月	後期分ユニセフ募金送金 『2008 Information KUSHIRO』発行
3 月	生協&共済加入窓口開設 出資金返還窓口開設

出典：北海道教育大学釧路生協 第 28 回通常総会議案書

表 5-1 は各学生委員会で共通で行われている活動である。総代会は大学生協の議決機関であるため、そのなかで学生委員会も大きな役割を果たしている。それ以外の活動は全て受験生・新入生向けの活動となっている。表 5-2 は各学生委員会の独自活動の一例として、釧路大学生協の学生委員会の年間活動の一覧を記載している。

5.2.1 北海道教育大学 5 生協学生委員会の年間共通活動

ここでは、学生委員会の年間共通活動について、その内容の詳細を見ていく。

5.2.1.1 新入生歓迎オリエンテーション

「新入生歓迎オリエンテーション」とは、毎年 4 月の上旬に大学に入学したばかりの新入生向けに行われる企画である。新入生は今までとは全く違う環境に身を置くということもあり、これから始まる大学生活に対して皆少なからず不安を抱えているものである。学業に対する不安も当然ながらあるだろうが、最も大きいものとしては「周りとうまくやっていけるだろうか」「友達はあるだろうか」などといった、新しい環境に身を置くからこそその人間関係の不安があるといえる。そんななかで、この新入生歓迎オリエンテーションを通じて楽しみながら同学年の多くの人たちと交流をしてもらい、周囲とのコミュニケーションや人間関係における不安を取り除きたい、または友達づくりのきっかけを見つけてもらいたい、というのがこの企画の主な目的である。

ここでは、北海道教育大学札幌生協の学生委員会を例として挙げる。

2008 年の札幌校の新入生歓迎オリエンテーションには、学生委員会の当初の予想を上回る 113 名の新入生が参加した。当日は AM11:00 にスタートし PM4:30 に終了するまでの間、「できるだけ多くの人と仲良くなって、いろんな人の名前を覚えてもらいたい」という学生委員会の目標のもとに、午前の部・午後の部に分けて様々な催し物が行われた。

表 5-3 札幌校の 2008 年新入生歓迎オリエンテーションのスケジュール	
AM11:00 開始	
午前の部	新入生をランダムに班分けしてのゲーム 1「自己紹介すごろく」 2「みんなの名前をおぼえましょ～」 3「班対抗クイズ大会」 大学生協に関する説明会
休憩	大学生協の食堂を利用した昼食
午後の部	新入生を専攻ごとに班分けしてのゲーム 「専攻の仲間の名前をおぼえましょ～」 個人戦での「ごちゃまぜビンゴ」
PM4:30 終了	

参加した新入生に対して行ったアンケートの中には、「予想以上に楽しかった」「色々な人と仲良くなることができた」などといった意見が数多くあった。また、企画した学生委員自身も「まさかあそこまで盛り上がるとは思いませんでした。終わった直後はフラフラでしたね」（2009年1月8日 札幌生協の学生委員からの聞き取り）と語っていることなどからも、この新入生歓迎オリエンテーションがいかに充実したものであったかがわかる。当初の「新入生の不安を取り除く・友達づくりのきっかけにしよう」という目的も達成されたといえるだろう。

5.2.1.2 総代会（総会）

「総代会（総会）」とは大学生協の意思決定のための最高議決機関であり、それは北海道教育大学5生協のような小規模大学生協においても同様である。毎年5月下旬に大学生協内で行われている。大学生協が主導となるため、その企画段階において学生委員会が主体的に関わることはそこまで多くはないものの、当日の運営・実行においては重要な役割を果たしている。ここでは総代会のなかでの学生委員会の役割について見ていく。

総代会における学生委員会の役割は、主に当日の議事進行を行うための補助的なものとなっている。北海道教育大学5生協では専従が専務理事ひとりしかいないため、総代会の全てをひとりで行うことは困難である。そのため、学生委員会がその補助を行うのである。

・出席総代の選出

総代会は大学生協や学生委員会のみで行うことはできず、組合員のなかから総代を選出し、当日の議事に参加してもらう必要がある。その総代の選出は学生委員会が行っている。大学生協店舗内・大学内での募集告知の掲示、授業の始まる前の教室で募集資料の配布や説明も行っている。周囲の組合員への説明なども行いながら、組合員の代表である総代を選出している。

また、学生役員候補の選出も行っている。役員は教職員と学生の組合員、専務理事で構成されており、そのうちの学生役員候補の選出も学生委員会が行う。常務理事や監事については学生委員が務めることが多いが、理事のなかには一般学生も含まれている。選手された役員候補は、総代会当日に総代によって承認される。

・当日の事前準備・進行の補助

当日の事前準備も学生委員会が手伝っている。会場設営や必要資料の準備、出席総代の確認などである。また、議事進行の際にも承認書類の配布・回収などを行い、総代会をより円滑に進めることに貢献している。

総代会は大学生協の運営において重要なものである。準備から当日の進行に至るまで、より確実な活動が求められるのである。万全の準備がされたしっかりとした総代会を行ううえで、学生委員会が大きな役割を果たしているといえる。

5.2.1.3 オープンキャンパス

「オープンキャンパス」とは、受験をひかえる高校生に対して毎年行われる大学の学内紹介である。「オープンキャンパス」というその名前からもわかるように、大学生協や学生委員会の単独で行われる他の企画とは異なり、この企画は大学側と連携して行われるものである。

ここでは、北海道教育大学旭川生協の学生委員会を例として挙げる。

当日は、大学側では北海道教育大学の学校説明や各専攻の教員による模擬授業などが行われているが、学生委員会ではより学生の立場にたったことを行っている。オープンキャンパスが行われる時期が7月下旬～8月上旬であるため、この時期の高校生というのは受験勉強をはじめたばかりであったり、まだ志望校も明確に決めていない、という人が多いのが事実である。そのため、受験に関してまだわからないことが多いのである。学生委員会ではその時期の高校生の現状を考えたうえで、2008年の旭川校のオープンキャンパスのなかでは3つのことを行った。

・学生相談会

学生相談会は、学生委員会や各専攻の一般学生を集め、会場に来た高校生や同伴の保護者と、来場者が疑問に思っていることや来場者からの質問に対して1対1の座談会形式で会話をするものである。受験や受験勉強に関することや、ひとり暮らしやアルバイトに関することまで、来場者からの質問は様々なものがあり、その質問に対し一人の学生として自分個人の実体験を交えながら返答し、学生だからこそできるよりフランクな会話をしていった。

・学内ツアー&学内スタンプラリー

学内ツアーは、講義室・体育館・大学生協・図書館などの大学内の主要施設へ高校生を案内し、その都度高校生と会話をしながら、大学内の雰囲気を感じ取ってもらうことを目的としている。学内スタンプラリーは学内ツアーと並行しながら行われており、高校生に自分の足で大学内の各スタンプポイントまで足を運んでもらい、学内ツアー同様に大学内の雰囲気を感じてもらうための企画である。

・展示会「ある学生の日常生活」

展示会「ある学生の日常生活」は、一人の学生の一日を追って、写真や文章でパネル形式にして教室に展示し、おもしろおかしく大学生の日常生活を見ることのできるものである。実際の学生の一日の生活を展示することで、大学内外での学生の生活を高校生に見てもらい、大学入学後の生活をイメージしてもらうことを目的としている。

旭川生協の学生委員会のメンバーは「オープンキャンパスでの私たちの企画を通して、大学や大学生の生活についてより多くのことを知ってもらいたいと思っています。受験についても大学生活についても『知らない』というのは不安なことのはずです。その不安を

私たちの企画によって少しでも解消してあげたいです」(2009年1月9日 旭川生協の学生委員からの聞き取り)と語っている。数年前に受験を経験した大学生だからこそのわかること・できることがあり、その経験を伝えることで高校生の役に立ちたいというのがこの企画の目的なのである。

5.2.1.4 推薦・前期・後期受験生歓迎

「受験生歓迎」とは、北海道教育大学各キャンパスの受験当日に行われる受験生向けの活動である。推薦入試・前期入試・後期入試の各時期に行われるものであるが、入試前の受験生の緊張や不安を少しでも解消することや、入試後の受験生に対して今後のアドバイスなどを行うことを目的としている。入試当日ということもあり大学構内への立ち入りを禁じられているなどあまり大きな活動こそできないが、そのなかでも受験生に対して学生委員会からできることがあるはずだと考え、以下のような活動を行っている。

・入試会場までの道案内

受験生のなかには、入試を行うために初めて北海道に来た、という人も多くいるため、入試会場となる大学への行き方がわからない受験生もいる。そんな人たちが入試当日に困ることのないように、学生委員会では入試会場までの道案内を行っている。駅前に学生委員会がスタンバイし、受験生が来たら大学行きのバス停留所まで案内をして、一緒にバスに乗車。降車後は、さらにそこから大学までの道のりを一緒に歩いていく、というものである。

・あたたかいお茶やココアの配布

入試当日の北海道はとても寒い時期であるため、それに配慮して受験生に対して入試会場の出入り口でお茶やココアを無料で配布している。配布の際には受験生との軽い会話も交えながら活動している。少しでも楽な気持ちになってもらいたい、という思いからのものである。

・入試後の資料配布

入試が終わった受験生に対し、今後必要となる大学生協関連の資料配布を行っている。その資料のなかには学生委員会がオリジナルでつくった冊子などもある。

・受験生との話し合い

学生委員会では、入試が終わった受験生のなかの希望者と話し合いを行ったりもしている。話し合いといっても固い雰囲気のものではなく、より日常会話に近い気軽なものである。他愛のない会話から、受験生の相談に乗ったり、入試後について実体験を交えてのアドバイスをするなど、様々なことを受験生と話している。

新入生歓迎オリエンテーションやオープンキャンパスのような大きな企画こそないものの、受験生との限られた関わり合いのなかで、少しでも受験生のためになることをしてあ

げたいという想いが見てとれる。入試という人生における重要な時期における経験、それがある学生だからこそできる活動であるといえる。

5.2.2 北海道教育大学 5 生協学生委員会の各キャンパスの独自活動

ここでは、各学生委員会が独自で行っている活動のなかから、いくつかの特徴的な活動の詳細について見ていく。

5.2.2.1 Co-oP ToPics

「Co-oP ToPics」とは、北海道教育大学釧路生協の理事会と学生委員会が毎週 1 回発行しているもので、大学生協内に掲示・HP に掲載されている。この活動は北海道教育大学 5 生協のなかでも、釧路校のみが行っている独自の活動である。

各週で学生委員会が食堂担当者・購買担当者・専務理事と話し合って掲載内容を決定し、決定した内容をもとにしてその週の Co-oP ToPics を学生委員会が手作りで作成している。掲載内容としては、食堂関連では期間限定メニューや九州・沖縄フェア、クリスマスフェアなどのイベントメニューの掲載、購買関連ではバリューキャンペーンや特売商品の掲載から教科書販売や卒業アルバム写真撮影のお知らせなどのその時期に応じたお知らせも行っている。もちろん「クイズ DE ポン！」などの企画の参加者を募集する記事や、通常総会のお知らせなど、大学生協関連の情報も掲載している。

図 5-2 「Co-oP ToPics」2008 年 11 月 28 日号



出典：北海道教育大学釧路生協 HP

この活動には大学生協の利用を活発化させようというねらいもあるが、それ以上に学生に

対してより多くの情報を伝えたいという目的がある。キャンペーンなどのお得情報を伝えることはもちろん、卒業アルバム写真撮影などの学生にとって重要となる情報も確実に伝える必要がある。学生のなかにはそういった重要な情報を知らないまま、終わってしまってから気付くという人もいる。Co-oP ToPics を発行することによって学生に対し様々な情報を伝え、大学生活の充実を図っているのである。

5.2.2.2 6月祭～お菓子詰め放題～

「6月祭～お菓子詰め放題～」とは、旭川生協の学生委員会が行った購買における企画である。

この企画を行った理由は単純明快である。もっと購買を積極的に利用してほしい、というのと、この企画そのものを組合員に楽しんでもほしい、という理由である。

一個の大きさが小さいお菓子や、パッケージの中で個別包装されているお菓子などを全てバラにして並べ、決められた大きさの袋に好きなだけ詰め込んでもらう。そしてその詰め込んだ量に応じて、100円や200円などといった格安料金で提供する、といった内容の企画である。開催期間中は学生委員会の予想を上回る多くの学生が訪れ、なかにはお菓子を詰め込む教職員の姿もあった。

この企画はオープンキャンパスなどのように大きな目的こそないが、バラのお菓子を格安で提供するという、利益を度外視しての組合員への「還元」という考えがそこにはある。この企画のように、楽しんでもらうことを目的とした組合員への活動も必要であるといえる。

5.2.2.3 11月祭～ランチコンテスト～

「11月祭～ランチコンテスト～」とは、2008年度に旭川生協の学生委員会が行った食堂における企画である。

この企画を行った理由には、最近の大学生の食生活は乱れがちである、という現状がある。1回の食事を菓子パンやカップラーメンひとつで終わらせてしまったり、食堂での食事も、カレーだけ、ラーメンだけ、といったような単品での注文が多く、バランスが悪いのである。そのような学生の食生活の現状を見て、「食堂を利用することができる昼食ぐらいはバランスのいいものを食べてほしい」という考えから行われたのがこの企画である。

企画の内容としては、自分が食堂で食べたメニューの組み合わせを学生に投稿してもらい、自分はこんなところに気をつけた、こういった栄養バランス意識してみた、などを書いてもらう。それを学生委員会や食堂の職員、さらには学生委員会が招いた北海道大学の栄養士が評価を行い、そのなかから最優秀賞や優秀賞などを選出する、といったものである。そして、最終日には学生委員会が招いた栄養士による「食生活相談会」が開かれた。規則正しい食生活の重要性や栄養バランスのとれた食事の大切さなどを話し、学生からの質問などにも答えていった。

この企画には食堂の利用を活性化させようというねらいと、何よりもこの企画をきっかけとして学生によりよい食生活をしてもらいたいというねらいがある。コンテストをきっかけとしてもう一度自分たちの食生活を見直してもらい、さらに栄養士から様々な話を聞き、アドバイスを受けることによって、今の食生活を改善してもらいたいという想いが込められている。

5.3 北海道教育大学 5 生協学生委員会の活動の特徴

これまでにあげた活動事例以外にも、北海道教育大学 5 生協の学生委員会では様々な活動を行っている。健康安全&事故防止のための取り組みとして、各キャンパスで「健康チェック」「自転車点検・空気入れ」「病院マップ」なども行っている。またこういった時期ごとの大きな企画のほかにも、日常的な活動では大学生協内の装飾活動や、教科書販売や出資金返還・住居斡旋の手伝いなども行っている。学生からの意見や学生委員会の発案をもとにして、各分校の学生委員会で独自の企画が行われる時もある。

北海道教育大学 5 生協の学生委員会の活動や彼らの活動に対する想いなどを見てきて感じたことが2つある。

ひとつめは、学生委員会の活動の根底には「学生の役に立ちたい」という想いが常にあるということである。「高校生の不安を取り除きたい」「学生生活を充実させてもらいたい」などに代表される言葉からは、学生委員会は常に学生のために、あるいは受験生などのために活動している、ということがわかる。学生委員会の活動は給与が出るわけでもなければ、活動しなければならない義務があるわけでもない。そういった活動に対する強制が一切ないにもかかわらず、彼らは自分たちの意思で「学生の役に立ちたい」という想いのもと活動しているのである。

ふたつめには、学生委員会は楽しみながら活動している、ということである。函館生協の学生委員は「自分自身活動していて楽しいです。楽しくなかったらわざわざ続けたりはしません」（2009年1月7日 函館生協の学生委員からの聞き取り）と語っているし、札幌生協の学生委員は「企画が終わって疲れきっていても、『楽しかったです』と言ってもらえると、やってよかった、と心から思います」（2009年1月8日 札幌生協の学生委員からの聞き取り）と語っている。また、活動について語っている学生委員が、非常にいきいきとしていたのも印象深かった。

そして、学生委員会にとってこれらの活動を行うことは、自分たちの「自己実現」にもつながるのである。活動することによって得られる楽しさや、企画や活動をやり遂げたときに得られる達成感・充実感などが挙げられるが、学生委員会はこういったものを得られるからこそ活動しているとも考えられる。いわば、達成感などを得るための「学生委員会自身のための活動」という側面もあるといえる。そういった側面があるからこそ、そういったやりがいがあるからこそ、学生委員会は日々の活動に取り組んでいるのではないだろうか。

北海道教育大学生協の学生委員会の活動は、大学の規模や学生員会の人数を考えても決して規模が大きいとはいえない。ただ少人数ではあるものの活動自体は非常に活発であり、先に述べたように、それぞれの活動に対する学生委員会の意識も高いといえる。実際に、大学生協からの仕事や定期的企画の実行だけでなく、学生委員会が自ら考え自主的に行っている活動も多くあり、各分校の年間活動を比較すると定期的企画以外はそれぞれの学生委員会で異なる活動を行っている。こういった活発な活動は、大学の規模が小さいからこそ逆にできるものなのではないだろうか。この活動の活発さ・活動に対する意識の高さこそが、北海道教育大学5生協の学生委員会の特徴であるといえる。

第6章 小規模大学生協における学生活動の考察

これまで、北海道教育大学5生協を取りあげて小規模大学生協の活動や学生委員会の活動について見てきた。ここでは、小規模大学生協における学生活動の現状について考え、他大学の大学生協における学生活動と比較しながら、今後の活動における課題の提示・提言を行っていく。

6.1 小規模大学生協における学生活動の現状

これまでも述べてきたように、小規模大学生協において学生委員会の活動は非常に重要な役割を担っている。オープンキャンパスなどの重要な企画・活動を大学生協に代わって実行、総代会の補助役を務めるなど、小規模であるが故に大学生協だけでは手が回らないことに対してバックアップを行い、大学生協の活動に対し様々な面で貢献してきている。また、活動そのものも活発であるといえることができる。

ただあえて厳しいことを言うのであれば、今の活動の現状で満足してはならないのである。今日の小規模大学生協が厳しい現状にあるなか、大学生協のなかで重要な役割を担っているからこそ、活動の現状をもう一度見直す必要がある。

6.1.1 毎年決まった活動が行われている傾向が強い

学生委員会の活動を見てきたなかで感じられることは、毎年ほとんど決まった活動のみが行われている傾向が強いということである。総代会のように毎年必要不可欠となる活動も当然あるが、それ以外の活動があまり見られない。大学生協や学生の状況というのは必ずしも同じではなく、その時々でニーズは変化していくものである。毎年決まった活動を行うのみで本当にそのニーズに応えられているかには疑問が残る。

6.1.2 学生委員会単独での活動が多い

学生委員会というのは大学生協があってこそその組織である。だが、活動内容を見ていると学生委員会単独で行われている企画・活動が多く、大学生協を巻き込んでのものが少な

いといえる。一例として、旭川生協で行われた七夕企画を挙げることができる。大学生協入口に笹を飾り、そこに学生が短冊に願いごとなどを寄せるという企画である。これは大学生協店舗の装飾活動の一環にはなるかもしれないが、それ以上の意味を見いだせない企画ともとれる。見方によっては、学生委員会の思いつき企画で自己満足の範疇に過ぎなくなってしまう。そういった活動が少なくないのが現状である。

6.1.3 企画段階での一般学生の参加が少ない

行われている企画・活動の多くは、先にも述べているように学生委員会単独のものが多く、つまり、企画段階でほとんど一般学生の参加がないのである。学生活動というのはなにも学生委員会だけが行うものではない、学生委員会以外の一般学生も参加してこそ学生活動となりうるのである。大学生協や学生委員会から一方的に供給・提供するものだけでなく、企画段階から一般学生が参加することも必要であるといえる。

6.1.4 一般学生のなかでの活動に対する認識が低い

大学生協や学生委員会の活動について学生に聞くと、「どんな活動をしているのかわからない」という意見が多く、なかには学生委員会の存在自体を知らない学生もいる。大学生協や学生委員会の存在を公にアピールするのが企画・活動の趣旨ではないが、知られていないということは、それだけ行っている企画・活動が学生のなかに浸透していない、認識されていない証拠でもある。学生生活に貢献することを目的として活動しているなかで、これは非常に大きな問題ではないかと考えられる。

6.2 他の大学生協における学生活動の一例

他の大学生協における学生活動のなかには、より大学生協や学生を巻き込んだの画期的な企画・活動が数多く存在する。そこには小規模大学生協の学生活動にはない企画力・行動力などがあり、今後の活動の参考となる点が多い。そんな、他の大学生協の学生活動についてここでは見ていく。

6.2.1 奈良女子大学生協の学生活動～ベジサンド物語～

奈良女子大学生協では、1999年12月中旬から2000年1月20日の期間にカフェの改装計画が実行された。この発端は1999年秋、一人の学生（寮生）が大学生協で何かしたいと店長・専務理事に申し出たのがきっかけである。そこからその寮生の友達・先輩の3人が大学生協との関わりを深めていき、「他大学の友達を呼んできて、シホンケーキ・お洒落なサンドがある自慢できるようなお洒落なカフェをつくりたい」ということでこの計画が始まった。

計画の実現のために、店長が学生と協力してカフェの雰囲気の研究や、壁紙の張り替え、カーテンの交換、食材の調達など様々なことを行った。また、当然学生自身も活発に行動

した。冷凍のシホンケーキを探していたときには、仕入れ価格が高くなるとわかると、手作りにすればコストを抑えられると考え、学生自らが手作りでシホンケーキを焼くことにした。ヘルシーで野菜のたっぷり入った「ベジサンド」を作ることが決定した際にも、学生が京都のパン工場へ直接足を運び、直接交渉や試食会、数多くのやりとりを重ねた結果、パン工場の協力で独自の胚芽入りロールパンがつくられることとなったのである。また、「ベジサンド」の販売継続が困難になったときは、事業連合の理事会で多くの専務理事を前に学生がプレゼン・試食会を行い、事業連合に協力を呼びかけた。その結果、現在では京都教育大学・滋賀大大津・奈良女の3つの大学生協でベジサンドが作られている。

この計画は、学生からの自発的な提案に大学生協が賛同し、協力し合いながらひとつのものを作りあげていった代表的な例である。学生と大学生協とが協力していくなかで、お互いへの理解が生まれ、大学生協の学生に対する活動に変化が現れ、学生のなかにも大学生協に対する意識の変化が生まれるのである。

奈良女子大学生協では、現在でも大学生協と学生による活動が活発に行われており、2007年7月の「学生生活の実態調査」で全国の大学生協のなかで最も満足度の高い大学生協に選ばれている。

6.2.2 宮崎大学生協の学生生活～学生の「食」と生活サイクル～

2006年に宮崎大学生協では、学生自らが食の重要性を再認識し、食生活を含めた生活習慣の改善を促す目的で、学部1年生へ「食」を中心としたアンケートを実施した。この活動は、学生の食生活改善のための方策を検討していた大学生協と、大学生の食生活の乱れについて関心をもった学生委員会の考えが一致して実行されたものである。

1年生1099人に、起床・就寝の生活習慣、食生活からミールカードおよび喫煙の有無などについてアンケートを行い、625人の回答があった。調査内容は自宅生・自宅外生、男子・女子、朝型・夜型の生活習慣のパターンに分け、朝食摂取の有無と授業への集中力の関係などについて分析された。その結果、生活習慣と授業への集中力の関係では、夜型の学生のほうが集中できないという結果が出た。また、平日5日間の朝食摂取率でみると、毎日朝食を摂っている学生の集中力がダントツに高い傾向が出た。さらに、自宅外生の朝食摂取率が非常に低いということもわかった。

そのような結果を受けて宮崎大学生協では、学生の朝食摂取率を上げてより健康的な学生生活を営んでもらうことを目標として、以前から食堂の営業時間を朝8時からにしていたことに加え、ミールカード利用者に朝食を食べたら100円を返却するようにした。さらには、新入生を対象に「学べる料理教室」を開催した。ただ料理を覚えるだけではなく、専門家の先生と事業連合の栄養士を呼び、自炊の豆知識や栄養の話からタバコの問題まで多くの話をして、規則正しい生活習慣や食生活の大事さをうったえた。

この活動はきっかけこそ学生委員会や大学生協の小さな思いからではあるが、対象となる学生の現状をアンケートという形で具体的に把握し、さらには大学生協でもそれに対し

てしっかりと対応する活動を行っている。その点で非常に評価できる活動である。

このアンケート調査の結果は、全国大学保健管理研究集会という全国集会で、137 演題のうち、6つの優秀演題のひとつに選ばれている。学生の積極的な取り組みが評価されたのである。

6.3 小規模大学生協における学生活動への提言

ここでは、これまで見てきた小規模大学生協の学生活動の現状と他大学の学生活動を踏まえて、今後の学生活動への提言を行っていく。

学生委員会のなかに、「学生の役に立ちたい」「学生生活に対してより良いはたらきかけをしたい」という思いがあることはとても素晴らしいことである。その思いをより具体的な形にするためには、今の活動をさらに一歩進んだものとする必要がある。

6.3.1 より自発的な企画や活動の発案・実行

ひとつめは、「より自発的な企画や活動の発案・実行」である。小規模大学生協が新しい企画・活動を行いにくい現状があるのであれば、学生委員会が主体となってそれを行う必要がある。学生の役に立ちたいと考えるのなら、学生の現状やニーズが毎年変化している以上、それに合ったことを毎年ひとつでもいいから行うのである。常に同じことを行っているだけでは本当の意味で学生生活に貢献することは難しい。学生の現状やニーズに則した活動を今以上に自発的・積極的に行うことが求められる。

6.3.2 大学生協と共同でのより目的意識の明確な活動

ふたつめは、「大学生協と共同でのより目的意識の明確な活動」である。学生の現状やニーズに則したことをするためには、宮崎大学生協の例のようにしっかりとした形で学生の現状を把握する必要がある。学生委員会のなかでの思いつきの企画・活動を行っただけでは、本当に学生が求めている活動になるかどうかはわからないところであり、下手をすれば学生委員会だけの自らの自己実現のためだけの活動になりかねないのである。そうならないためにも学生の現状やニーズをはっきりとした形で把握し、より目的意識をはっきりさせる必要がある。宮崎大学生協のアンケートというのもその方法のひとつであり、他にも総代会のなかでもっと学生の意見を聞く場面を設けることや、「組合員の声カード」をより効率的に活用することなどができる。

そして、今以上に大学生協と共同しての活動も求められる。学生の要望のなかには購買・食堂などの大学生協に対するものもあると考えられるうえに、学生委員会という小規模の学生の組織だけでは活動の幅に限界があるのも事実である。そのような場面が考えられるからこそ、大学生協と学生委員会の協力体制が今以上に必要なのである。学生が日常的に利用する大学生協という場をさらに有効に活用することで、より多くの学生により良いはたらきかけを行うことができるのである。

6.3.3 企画段階での一般学生の参加の活性化

みつつめは、「企画段階での一般学生の参加の活性化」である。一般学生のなかでの大学生協や学生委員会の活動に対しての認識が低い、というのは先に述べたとおりである。その影響は総代会の出席数の低下などにも表れている。それであれば、奈良女子大学生協のように活動において企画段階から学生に参加してもらえばいいのではないだろうか。参加した学生のなかには大学生協や学生委員会に対するより深い理解が生まれ、また学生が参加することで学生の意見を直接聞くことができ、それをすぐに反映させることもできるのである。北海道教育大学5生協では学生からの意見があまりあがってこないという現状がある。だからこそ学生の意見を直接聞くことのできる場面を設け、さらには大学生協についてより深く知ってもらうことが必要なのである。そのための第一歩として、企画段階からの一般学生の参加の活性化が重要となるのである。

6.3.4 今後の学生活動

ここまでで学生活動に対する提言ばかりを述べてきたが、彼らが非常に努力をしているというのもまた事実である。北海道教育大学生協の学生委員会の活動自体は活発であり、その生き活きとした雰囲気や楽しんで活動している様子には非常に好感がもてる。授業終了後の時間を利用しての活動だけではなく、必要であれば授業の合間を利用したり、自分たちの昼休みを使ってまで活動を行っている。大きな企画がある時などは授業終了後の活動が深夜まで至ることも多々あり、春休みや夏休みなどにも自主的に集まって打ち合わせや準備を行っている。その活動は表立ったものではなく、学生にあまり認知されていないとはいえども、その活動にかける想いや努力は並大抵のものではないといえる。これは学生委員会に所属していた経験のある私自身がよく理解していることである。

だからこそ、今以上に活動を意味のあるものにしてほしいと考えている。学生のなかで大学生協に対する認識が低いというのは非常に残念なことであり、またそれに対して大学生協側が具体的なアクションを起こせないでいるというのも事実である。そんな状況だからこそ、学生委員会が学生と大学生協の双方の立場を理解できる存在として、この現状を改善できるような活動を行ってもらいたい。その活動が学生と大学生協との理解を深める結果となり、学生の大学生協の利用の活性化や、学生委員会の「学生の役に立ちたい」という想いの実現へつながるといえるだろう。

おわりに

最後に、今回この卒業論文を作成するにあたってご協力していただいた方々に深くお礼を申し上げます。突然のお願いであったにもかかわらず、聞き取り調査や資料提供に快く協力してくださった北海道教育大学生協の専務理事の方々、忙しいなか時間を割いてお話を聞かせてくださった学生委員会の方々、全国大学生生活協同組合連合会や大学生協北海道事業連合の方々、本当にありがとうございました。

また、私個人の見解による記述も多く含まれているため、私の理解不足により、大学生協関係者の方々の見解と異なる記述もあるかとは思います。その点に関しましては、この場を借りてお詫び申し上げます。

そして、卒業論文の作成当初から長期間にわたりご指導していただいた角先生には本当に感謝しています。私がいたらないばかりにご迷惑をおかけすることも多々ありましたが、それでも変わらず熱心な指導をつづけていただいたおかげで、この卒業論文を完成させることができました。本当にありがとうございました。

参考文献・参照 HP

<参考文献>

- ・現代生協論編集委員会，2005，『現代生協論の探求』コープ出版
- ・番場博之／千葉商科大学生協，2007，『生協の本』コープ出版
- ・名和又介／横山治生／全国大学生協連京滋・奈良地域センター，2008，『20 年後の「体」「心」「社会」をつくる 食の講座 大学生協寄付講座』コープ出版
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2006，『UNIV.COOP No.344』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『大学生協 REPORT2008』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『21 世紀を生きる大学生協のビジョンとアクションプラン』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『第 43 回 学生の消費生活に関する実態調査 CAMPUS LIFE DATA 2007』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『2007 年度 保護者に聞く新入生調査 報告書』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『大学生協ハンドブック 大学生協を深く理解したい人に』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『大学生協設立ハンドブック』
- ・全国大学生生活協同組合連合会，2008，『ANNUAL REPORT 2007 学生総合共済 事業報告』
- ・藤岡武義／（財）生協総合研究所，2008，『生活協同組合研究 No.385』三協社
- ・北海道教育大学札幌生活協同組合，2008，『北海道教育大学札幌生活協同組合 2008 年度定例総代会 議案書』
- ・北海道教育大学旭川生活協同組合，2008，『北海道教育大学旭川生活協同組合 2008 年度通常総代会 議案書』
- ・北海道教育大学岩見沢生活協同組合，2008，『北海道教育大学岩見沢生活協同組合 2008 年度定例総会 議案書』
- ・北海道教育大学函館生活協同組合，2008，『北海道教育大学函館生活協同組合 2008 年度通常総会 議案書』
- ・北海道教育大学釧路生活協同組合，2008，『北海道教育大学釧路生活協同組合 2008 年度通常総会 議案書』
- ・北海道教育大学釧路生活協同組合，2008，『北海道教育大学釧路生活協同組合 2008 年度通常総会 総会資料集』

<参考 HP>

- ・全国大学生生活協同組合連合会（全国大学生協連）HP：<http://www.univcoop.or.jp/>
- ・大学生協北海道事業連合 HP：<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/>

- 北海道教育大学札幌生活協同組合 HP :
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/hue-sapporo/index.html>
- 北海道教育大学旭川生活協同組合 HP :
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/hue-asahikawa/index.html>
- 北海道教育大学岩見沢生活協同組合 HP :
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/hue-iwamizawa/index.html>
- 北海道教育大学函館生活協同組合 HP :
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/hue-hakodate/index.html>
- 北海道教育大学釧路生活協同組合 HP :
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/hue-kushiro/index.html>
- 財団法人 日本国際教育支援協会 : <http://www.jees.or.jp/>
- Wikipedia－大学生協－ :
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9F%E5%8D%94>
- Wikipedia－学生委員会－ :
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%A6%E7%94%9F%E5%A7%94%E5%93%A1%E4%BC%9A>